近世名文選

375.9
Ta11
資料室

42619
教科書文庫
4
810
51-1931
20000
14526

文部省檢定濟

昭和六年一月二十三日 師範學校 中學校 高等女學校 國語科用

文學博士 高木武編

近世名文選

東京 冨山房藏版

資料室

375.9
Ta11

本居宣長

廣島大學圖書之印
広島大学 教 14526 図書

凡例

一、本書は、師範學校・中學校・高等女學校等の上級用國語教科書として校訂・編纂したものである。

二、本書は、卷頭に長文の解説を附し、文學史上における近世名家の作品の價値を明らかにし、併せて諸名家の風格をも知らせることに努めた。

三、本書は、頭註の簡潔・明快を期し、敎授の便に供した。

解説

一　時代思潮と近世文

一

時代をくぎつて獨得な特色と光彩とを發揮しつゝ、貴族から武家へと流動推移して來た國民文化の主潮は、元和偃武を轉機として民庶の間に遞下擴充し、平民階級を基調として絢爛な華を開き、江戸時代三百年の盛觀を現出した。新興階級の人々は因襲や典型に支配せられることがないだけに、自由濶達な意氣をもつて自己の新天地を開拓し、眞實な人生に直面しようとつとめた。隨つて、當代精神は一面において、因襲の打破、個性の解放、自由への邁進、現實への執著などに向かつて力強く働いたが、また他の一面においては、自省と批判とを伴なひ、理想への

憧憬、正しい傳統の擁護、自己本領の自覺を促した。かくて複雜な思潮の分解・綜合が行はれ、さま〲な文化現象が生成せられたが、どの方面においても、更生復興の精神が溢れ、革新勃興の機運が漲つてゐる。

俳壇における松尾芭蕉、戯曲界における近松門左衛門、小說界における井原西鶴等の劃時代的革新大成は、いづれもこの機運の具體的實現と見られるが、漢學の方面における伊藤仁齋の古學、荻生徂徠の古文辭學などの唱道や、國學の方面における釋契沖・荷田春滿・賀茂眞淵等の古學復興の叫なども、時運によつてよび覺された自覺の聲である。

二

戰國亂離の間、五山の僧徒によつて擁護傳承せられた漢學は、江戸時代に入ると俄に勃興し、空前の盛況を呈したが、文化の基調を民庶に置いてゐる當時にあつては、漢學思想を宣傳し、儒教主義を普及するに當り、漢文では不便であるところから、漢學者も好んで和漢混淆の表現形式を採用した。

和漢混淆文は、雄剛勁健な漢文脈と優柔典雅な和文脈とを折衷調和したもので、既に平安朝末頃にあらはれた「今昔物語」などから萌し始め、鎌倉室町時代においては、戰記物語をはじめ、紀行・隨筆・雜纂・謠曲などを通じて異常な發展を遂げ、國文の表現形式中で重要な一體を成し、江戸時代に入つては、時文の模範となつたものである。

三

漢學の盛行するにつれ、それと對抗の境地に立ち、學問・文藝の一分野を領有して、斯道の發展興隆に多大な貢獻をもたらしたのは國學者の一團である。

當代風潮の中に、我が國家・國民に關する自覺を缺いて、外國の思潮・文物を崇拜する傾向があり、物質を本位として俗惡な現實を謳歌する風習があるのに對する不滿から、國學者は自然に、素朴純眞な古代にあこがれ、古典の中にひそむ固有の純風美俗、正大公明な日本精神を强調しようとして、專ら古典の研究に力を盡くした。そして、學者として多くの業績を擧げると同時に、作家としても和歌や文章の創作を盛に試みたが、その文章は彼等の間に共通的に懷抱せられてゐる尙古的な思想・趣味の表現過程と

して、おのづから擬古的な形體を成し、優柔流麗にして蒼古典雅な趣致を帶びてゐるので、世にこれを雅文または擬古文と稱してゐる。これは中古の國文を標準としたものであることはいふまでもないが、題材・組織・修辭などの上には、漢文の體樣をも少からず採用してゐる。

四

和漢混淆文は漢文脈と和文脈とを折衷したものであるけれども、主として漢學者の手に成つてゐるので、概して漢文の風格が基調となつてをり、雅文は漢文の體樣をも加味してゐるけれども、國學者の創作過程であるだけに、文の主體は飽くまでも洗煉せられた中古國文の風趣を帶びてをり、共に國文界に重きをなしてゐた。

然るに、この兩文體の間には、和漢文脈の配合折衷の度合に幾多の段階・手法があり、また作者の個性や境遇・職掌上の相違があり、實際においては、剛健・優柔・質實・華麗・粗野・典雅・飄逸・洒脫・奇警・淸尙・濶達など、多種多樣の風格を釀し、素材・內容の如何によつて、俳文・狂文・美文・實用文などの種別をも生じてゐる。

二　貝原益軒と「樂訓」

貝原益軒は名を篤信といひ、福岡藩の醫官である。京都に出て松永尺五・木下順庵等に就いて學び、またみづから研修して一家をなし、正德四年八月二十七日、八十五歳で歿した。學風は實用を旨とし、著書も處世・修養の要道を說いたものが多い。

「樂訓」三卷は人生和樂の要諦を說いたもので、行文が平易率直にして老巧雅馴の趣がある。

三　松平定信と「花月草紙」

松平定信は田安宗武の第三子で、奧州白河城主松平定邦の嗣となり、老中として將軍家齊を佐けて政務を總攬し、大いに治績を擧げた。後、致仕して樂翁と稱し、文政十二年五月十三日、七十二歳で歿した。著書は六十餘部に及び、學者・文人としても多大な業績を遺してゐる。

「花月草紙」六卷は定信の見聞・感想を錄した隨筆で、理智的な人生觀照の間に淸尙な自然描寫を挿み、獨得の興趣を醸してゐる。

四　本居宣長と「玉かつま」「鈴屋集」

本居宣長は伊勢國松坂の人で、鈴屋（すゞのや）と號し、京都に上つて儒學や醫學を修めて歸り、小兒科醫として開業したけれども、學問研究を本意とし、賀茂眞淵の門に入つて古學に志し、努力研鑽してその蘊奥を究め、名聲天下を壓した。享和元年九月二十九日に歿したが、時に年七十二歳であつた。彼は國語・國文・國史有職故實等の各方面に幾多の創見・卓說を發表し、また和歌・文章にも餘力を割き、六十餘部の著作を遺して偉大な功績を擧げた。

「玉かつま」十四卷は宣長の隨筆で、作者の學說・人生觀・社會觀・性格・趣味などが鮮かに現れ、その文姿も明確輕妙で、暢達高邁な風格がある。

「鈴屋集」九卷は宣長の歌文集で、創作方面における彼の面目が活躍してをり、高雅

幽玄な風韻が漂うてゐる。

五　三浦梅園と「梅園叢書」

三浦梅園は豐後國杵築の人で、綾部絅齋・藤貞一に就いて儒學を學び、一家を成して藩の家老格に昇り、寛政元年三月十四日、六十七歳で歿した。彼は天地造化の理を究明するのを本旨として條理學と稱する一派を樹てた。

「梅園叢書」三卷は梅園の隨筆で、人倫・處世の要道を說いたもの。文格は雄健質實の風趣を帶びてゐる。

六　伴蒿蹊と「閑田文草」

伴蒿蹊は近江國八幡の人で、閑田子と號し、京都に出て有賀長伯・武者小路實岳に學んだが、後、獨學研修して大成し、文化三年七月二十五日、七十四歳で歿した。彼は和漢の學に造詣が深く、文章にも巧であつたが、殊に和歌をよくし、平安四天王の一

人に數へられた。

「閑田文草」五巻は蒿蹊の文集で、文の風格は高雅優麗、清淡高逸な趣があり、一種の氣品と餘情とを藏してゐる。

七　藤井高尙と「松屋文集」

藤井高尙は松屋と號し、備中國吉備津宮の祠官で、本居宣長の門に入り、國學を修めて一家を樹て、天保十一年八月十五日、七十七歲で歿した。彼は和歌にも堪能であつたが、最も「源氏」風の文をよくした。

「松屋文集」二巻は高尙の文集である。行文が優雅暢達で氣品が具り、筆者の面目がよくあらはれてゐる。

八　石原正明と「年々隨筆」

石原正明は尾張の人で、本居宣長・塙保己一の門に入つて研學し、最も有職に精しく、

また歌文をよくした。文政四年正月七日、六十二歲で歿した。

「年々隨筆」六巻は正明の見聞・感想を錄した隨筆で、文の風尙が潤達清爽な趣致を帶び、感興をそゝるものがある。

九　中島廣足と「橿園文集」

中島廣足は肥後國熊本の人で、橿園と號した。國學に志し努力研鑽して一家を成した。長崎や大阪に住んでゐたこともあるが、後、熊本藩の師範役に任ぜられ、文久四年正月二十七日、七十三歲で歿した。彼は國學者である外に、歌人・文人としても盛名があり、著書なども五十餘部に及んでゐる。

「橿園文集」三巻は廣足の文集で、縱横自在に達筆を驅使してあるが、文脈が整ひ、勁健清雅にして無限の風韻を藏してゐる。

一〇　加藤千蔭と「うけらが花」

加藤千蔭は本姓橘氏、芳宜園と號した。江戸に生まれ、賀茂眞淵の門に入つて國學を修め、斯道の奥儀を究めて大いに名をなし、文化五年九月二日、七十四歳で歿した。彼は國學上に貢献したことも少くないけれども、その長技はむしろ和歌・文章の上にあり、殊に歌道においては海内随一の譽があつた。

「うけらが花」八巻は千蔭の歌文集で、巧緻な措辭と流麗輕妙な趣致とが相擁して獨得の文格を成し、陸離たる光彩を放つてゐる。

一一　村田春海と「琴後集」

村田春海は江戸に生まれ、琴後翁と號した。夙に眞淵の門に入つて國學を學び、また服部仲英・皆川淇園に就いて漢學を修め、いづれも蘊奥を究め、その門に遊ぶ者も多かつた。文化八年二月十三日、六十六歳で歿した。彼は學説・見解においては獨得の創見を持し、和歌も老巧であつたが、文章の上に最もすぐれた天分を發揮し、當時第一流の盛名を博した。

「琴後集」十五巻は春海の歌文集で、濶達・流麗・巧緻な筆致をもつて詩想を縱横に披瀝してあり、無限の生氣と興趣とが溢れてゐる。

一二　清水濱臣と「泊洦舍集」

清水濱臣は江戸の人で、泊洦舍と號した。春海に就いて古學を學び、後に一家を成し、文政七年八月十七日、年四十九で歿した。彼は和漢の學に通じ、考證の道にも深く、和歌をよくし、殊に文章に長技を有してゐた。

「泊洦舍集」八巻は濱臣の歌文集で、艶麗優雅・巧緻暢達の風趣があり、雅文の逸品として世に推稱せられてゐる。

一三　上田秋成と「藤簍冊子」

上田秋成は大阪の人で、加藤宇萬伎が大阪城の勤番として滞在した時、その門に入つたが、後、自學によつて研修し、大いに造詣を深うした。文化六年六月二十七日、

七十六歳で歿した。彼は多能な才人であつたから、國學者・歌人・俳人・小説家・畫家として、いづれも優に一家を成した。

「藤簍冊子」六卷は秋成の歌文集である。文の風格は奔放自在・遒勁華麗・輕妙暢達の妙趣があり、百花繚亂の雅文界にあつても、一際目立つて異彩を放つてゐる。

一四　賀茂眞淵と「賀茂翁家集」

賀茂眞淵は遠江國岡部の人で、縣居と號した。京都に出て荷田春滿に就いて和學を學び、江戸に赴いて古學の研鑽と興隆とに力を盡くした。明和六年十月三十日に歿したが、時に年七十三であつた。彼は秀拔な天分をもつて國學の振興、歌道の革新、雅文の大成などに努力し、いづれの方面にも第一人者たる地歩を占め、偉大な功績を遺した。

「賀茂翁家集」十卷は眞淵の歌文集である。その文格は雄健典雅にして古文の詞態を巧に適用し、一種清尙な氣品と風韻とを宿してゐる。

一五　室鳩巢と「駿臺雜話」

室鳩巢は名を直淸といひ、江戸の人である。木下順庵・羽黑成實に就いて儒學を修め、幕府の儒官となり、享保十九年八月十二日、七十七歳で歿した。彼は朱子學を主張し、名教を維持するのを任として努力貢獻した。

「駿臺雜話」五卷は鳩巢の隨筆で、門人に話した體裁にしてある。文章は質實勁健で眞率雅典な風格を帶び、特殊の興趣がある。

一六　横井也有と「鶉衣」

横井也有は尾張名古屋藩の重臣であつたが、文雅を好んで藝術趣味に始終し、天明三年六月十六日、八十二歳で歿した。彼は俳句をよくし、卓拔な天分をもつて俳文を大成し、不朽の名聲を博したばかりでなく、漢詩・和歌・狂歌・狂文にも巧であり、まさに多角的な才人の面目を發揮してゐる。

「鶉衣」十四巻は也有の俳文集で、筆者の歿後、太田蜀山人・石川雅望等の盡力によつて公刊せられたものといふ。行文は奇警・清尚・輕妙・洒脱にして、よく俳文特有の妙味を體現し、斯道の代表的傑作として世に重きをなしてゐる。

編者しるす

近世名文選

目次

樂訓

一 春……一
二 夏……四
三 秋……六
四 冬……九

花月草紙

一 花のけはひ……一三
二 月のさしのぼる頃……一四

三　道まねぶ人……一五
四　雨の趣……一六
五　ことわり……一九
六　道知る心……二〇
七　月なき夜半……二〇
八　日新の教……二二
九　家國のすがた……二二

玉かつま

一　新なる說を出すこと……二三
二　道にかなはぬ世の中のしわざ……二五
三　書を讀むことのたとへ……二六
四　新にいひ出でたる說……二六
五　ひとむきにかたよることの論……二八

六　學者のまづかたきふしを問ふこと……二九
七　書うつしもの書くこと……三〇
八　手書くこと……三二
九　花のさだめ……三三
一〇　道を說くこと……三五
一一　今の人の歌文ひがごと多きこと……三七
一二　道のひめごと……三八
一三　足ることを知るといふこと……三九
一四　山林を住みよしといふこと……三九
一五　一言一行によりて人の善惡を定むること……四一
一六　古よりも後の世のまされること……四一

鈴屋集

一　月前の納涼……四三

二　雪のあした友のもとへ……四五
三　述懐……四六

梅園叢書

一　毀譽……四八
二　人の子の育てやう……五〇
三　誠……五一

閑田文草

一　春の曉……五三
二　冬のこゝろ……五四
三　年を惜しむ……五六

松屋文集

一　五月雨……五七
二　荻風……五七
三　硯に書きてそふる……五八
四　さらぬわかれ……五九
五　松……六〇

年々隨筆

一　散るぞめでたき……六一
二　菊……六二
三　夕と朝……六三
四　鳥獣……六三
五　學者の心得……六四
六　隨筆……六四

榲園文集

一 春の月……六五
二 蚊遣火……六六
三 埋火……六七
四 をのことあらんもの……六八
五 黄昏……六九
六 驛路……六九
七 漁村……七一
八 夜學……七三
九 書……七四

うけらが花

一 泊洎舍の蓮……七五

二 山里……七七
三 隅田川の雨……七八
四 初雁……八一
五 黄葉……八三
六 山水のすがたをゑがかせて……八四

琴後集

一 知足庵の記……八七
二 隨時樓の記……八八
三 燒畫の記……九〇
四 秋興……九二
五 伴蒿蹊におくる……九三
六 上田秋成がもとへ……九五
七 月に對して志をいふ……九六

八　芳宜園の大人の墓を祭る……九八

泊洦舍集

一　花に寄する祝言……一〇一
二　月の夜友のもとへ……一〇四
三　秋の七草……一〇五
四　擣衣……一〇七
五　漁夫の辭……一〇八
六　縣居の翁の墓參會に……一〇八

藤簍冊子

一　十雨言(一)……一一〇
二　十雨言(二)……一一三
三　春のまうけ……一一六

四　月あかき夜……一一六

賀茂翁家集

一　櫻……一一七
二　隅田川の月……一二〇
三　手習にものに書きつけたる……一二三
四　世の人……一二三

駿臺雜話

一　年にはづかし……一二四
二　朝顏の花……一二五
三　手折りし枝を慕ふ春風……一二七
四　月は世々の形見……一二八
五　壬子試筆……一三〇

鶉衣

一　奈良團扇の贊…………一三三
二　長短の解…………一三四
三　百蟲の譜…………一三六

廣島大學圖書之印

近世名文選

樂訓　貝原益軒

一　春

花もやう〳〵咲きつゞき、梅花すでにうつろひて後新なるは、わが國ならぬからもゝの花なるべし。桃紅なるは、たなびく雲のおもかげのたつこゝちす。李白きは、消えがての雪の梢に残れるかと見えていとうるはし。櫻のほころび出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心を動か

よしさらば云云　「續古今集」巻二に見える藤原爲家の歌。

してえならぬながめなれ。これわが日の本にて、四時の花の多きが中にも、第一の見ものとなれば、梅散りて後、この頃のこと花はみなけおされぬ。されど日頃待たせ〳〵て、やう〳〵咲けるが、飽くまで見るほどもなくとく散るは、またうらめし。

よしさらば散るまでは見じ山ざくら花のさかりを
　　おもかげにして

と古の人のよみけんも、後の思出にせんとにや、なさけ深し。

春やう〳〵深くなれば、風やはらかに、日あたゝかに、百草芳を争ひ、群花艶を競ふをりなれば、いづれの所か春のなからんや。かかるけしきにふれては、人の心も浮きたちて、思ふどちかいつらね、春をたづねてあくがれありき、ひねもす花をながめくらすこそ、目をほしいまゝにし、心を快くするわざなれ。世の中のいみじくうれしきことの、あるが中なるその一つなるべし。わが心のた

井出　山城國綴喜郡。山吹の名所。「駒とめてなほ水かはん山吹の花の露そふ井出の玉川」、藤原俊成。新古今集）

つら〳〵つばき云々　「こせ山のつらつら椿つらつらに見つゝ思ふな巨勢の春野を」（坂戸人足。萬葉集）

のしみを知らざる人は、無頼の少年の、閑をぬすみてそゞろに行樂するに似たりと思ふべし。

彌生も半ばなる頃、八重山吹の風に飜るは、井出のわたりも見るこゝちして賑はしければ、目かれせずながめがちなり。春の花の多かる中に、たゞ椿のみこと花にかはり、さかり久し。ことさら列（つら）をなして植ゑたるつら〳〵つばき、つら〳〵に見れどもあかず。階のもとのさうびも夏を待ちがほなり。春の花は、いづれとなくひらけ出づる色、ことに目おどろかれぬるに、心短くて早く散りぬるはうらめし。

九十の春光はいと長けれど、何くれと紛らはしく、風雨もまたしげければ、なすことなく、はかなく過ぎて、とゞめあへぬ春のかぎりのけふの日の夕暮にさへなりぬ。落花寂々たる黄昏の時は、春のなごりいと惜しむべし。

二　夏

やがて五月になりぬれば、大空のけしき、さいつ頃に引きかへて、さみだれ久しく續き、をり／＼は鳴神おどろ／＼しくて、降らぬ時だに曇らはしく、もののあやめも知らず、園をうかゞふべきひまもまれにして、つねに垂れこめて日數を經るもわびし。夏もややう深くなりぬれば、木として茂らざるはなく、草として榮えざるはなく、日々にものをひき延ぶるやうに見えて、ひたすらに綠の色深き夏木立こそ、花にもをさ／＼劣るまじけれ。春の花はところ／＼に咲きてまれなり。夏は山も里も、ありとしある草木ごとにうちはへて、みな綠の色なれば、春にことなるながめなり。八千草に植ゑあつめてなづさひし前栽の草木ども、雨を帶びておの／＼その梢をあらはし、所えがほにまかせて生ひしげれる

昔おぼゆる花橘の云々「さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。」（詠人不知。古今集）

も、うれしと見ゆ。昔おぼゆる花橘のかをれる夜は、追風もいとなつかし。早苗採る頃、田家は雨を待ちえて、いそがはしく賑はし。この頃遣水のほとりに飛ぶ螢の、音もせですだくを見れば、鳴く蟲よりいとあはれむべし。夏山のけしき、青みわたりたる高き峰、大空につらなりて、雲の外に聳えたるを飽くまで見るこそ、ことにすぐれて快くするながめなれ。

水無月の頃になりぬれば、端居の風したしく、わらふだ敷きてをるも快し。池の心深く、蓮葉のにごりにしまずして、花ならで夕風ににほひわたるだにも、こと草にすぐれたり。ことに花の笑の脣ひらけたるは、所せきまでかをりみちて、世に似たるものなく淸らなり。涼を逐ひて木蔭に休らひ、木々の下風のなつかしきに、淸き泉をむすび、夏を忘るゝこゝちするも、いさぎよし。光明らけき夜半の月を、淸き水に宿して見るはさらなり、遣水の音など聞

ともし火も親しく云々
「時秋積雨晴、新涼入郊墟、燈火稍可親、簡篇可卷舒。」(韓愈)

くも、いみじう心ゆくばかりなり。日頃經て暑さたへがたきに、夕立のしぐれわたりて、なごり涼しきもいと快し。

三　秋

秋來ぬれば、はつ風涼しくうち吹きて、草木のそよぎ、秋の聲のいづくにもうち靡きて聞ゆるこそ、はつ春の風にかはり、心を痛ましめ身にしみて、金氣のいたれるしるべとおぼゆれ。きり〴〵すのきざはしの下にすだくも、をり知りがほにぞ聞ゆる。大暑やうやく退き、新涼すでに來りぬれば、あたかも酷吏の去りて、故人のこゝに來れるこゝちぞすなる。この頃は人の形氣力をえて、ともし火も親しくなりぬれば、古き書ども巻きのぶるに時をえて、よろづのたのしみにまさり、こよなうおもしろし。荻の上風、萩の下露、さま〴〵の蟲の音、みな秋のあはれをもよほして、身にしむ

月ごとに云々
「月ごとに見る月なれどこの月の今宵の月に似る月ぞなき」(村上天皇。續古今集)

ことかぎりなし。門田の稲葉、朝露にうるほひ、ゆふべの風おとづれてそよぐけしき、ことさらわせ・おしねの先立ちおくれて穗に出でたるありさま、みな見るにたへたるながめなり。

秋のもなかになりぬれば、一とせを經て待ちえたる月明らけきは、凡そ天地の間にならびなきついで一つの見ものなれば、よろづのうるはしき景物は、みなその下なるべし。このゆふべ、この景にあへることぞ、うき世の中のおもしろさも、あはれさも殘らぬをりなれ。年のはに一とせのうち、月ごとに上の弓張より居待の頃まで、空晴れぬれば、夜ごとに心をたのしましめ、目をよろこばしむること、さらに數なし。ことさら三秋の間、をり〳〵のいみじき光を、年ごとに心にまかせて見ること、まことにさいはひ多きこの世なり。凡そ天が下の國は、八すみをしろしめして、天地はみなその領し給へる國のうちなれば、賤しきわがともがらまで、天

あたら夜の云　云「あたら夜の月と花とをおなじくば心知れらん人に見せばや」（原信明。後撰集）

ひとりぞ月は云々「寂しさにあはれもいとどまさりけりひとりぞ月は見るべかりける」（千載集）

李白　支那唐代の詩人。

今人は云々「今人不レ見二古時月一、今月曾經レ照二古人一、今人若二流水一、共看二明月一皆如レ此。」

つ御空にたゞ一つかゝれる月を、おのがものとしてほしいまゝに仰ぎ見るも、いとも畏く、身にし餘りていみじきさいはひなり。宿りわかず、賤しきちまたをもおなじく照らせる、いとめでたし。年々に月と花とを飽くまで見るは、まことに思出多きこの世なりといふべし。あたら夜の月なれば、おなじくは心知れらん人と共に見んことほいなれど、おなじ心に見る人まれなれば、西行が「ひとりぞ月は見るべかりける」とよめるも、むべなり。もろこしの人も「秋月は俗士と見るべからず。」といへり。李白は「今人は古時の月を見ず。」といへれど、昔世々の人のながめこしもこの月なれば、古人の形見となれるも、昔おぼえてしのばし。古今の人の世を去りゆくは、流水の逝きてかへらざるがごとし。たゞ月の光のみ、古今變ることなきこそ、こよなうめでたく貴ぶべけれ。月の梧桐の上にいたり、風の楊柳のあたりに來るは、心を洗ひ興をもよほし

少し春ある云　云「空さぶみ花にまがへて散る雪に少し春あるこゝちこそすれ」（枕草子）

木の葉ふりて云々「冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ峰にさびしき」（祝部成茂。新古今集）

て、えもいはぬ快きをりふしなり。四時ともに思出多きこの世なれど、とりわき秋の月は、見ざらん後の世の光までも思ひやられはべり。

四　冬

冬も來ぬれば、今朝より馴るゝ埋火のもと、やう／＼立ちはなれがたし。露と霜とおきかはし、もみぢ色濃く、木々の梢、淺茅が原も冬枯のけしきとなり、面がはりするも、秋にことなるながめなり。神無月の時雨も過ぎて、日あたゝかなれば、少し春あるこゝちす。むべこの月を小春とぞいへる。されど一の日、二の日やうやくかさなれば、風氣いよ／＼はげしく、木の葉ふりて山もあらはに見え、殘れる松も峰にさびし。春・夏・秋の艶なるけしき、よそほしかりつるありさま、みなこの時にいたりて盡きぬれば、ことのほか

にも變れる空かなと、目おどろかれぬる。
日頃雪いみじう降りて、いかめしう積りたる曉は、山も里もひたすら銀世界となりて、世かはり、けしきことなるありさまなり。冬ごもりせし梢の枯れたるも、ふたたび花咲けるがごとし。ことさら冬の夜のすめる月に、雪の光りあひたる空こそ、見る人なく、ひとり身にしみて、あはれも深けれ。空はれて後まで、友待つばかりところ〲に消えのこりたるはだれ雪も、いと心にくし。かゝる時、するわざなく、たゞ袖くゝみしていらゝぎをる人は、いとわびしげに見ゆ。あるは埋火にむかひ、書を卷きひろぐるをもてわざとする人は、たのしみ深くぞありぬべき。凡その事、年に先立ちて早く計るべし。若き時つとめて書を讀みならはば、かゝる時もわびしかるまじ。
冬の末つ方にもいたりぬれば、今年の日數殘り少く、こよみの

軸あらはるゝばかりにて、春の隣すでに近し。年の終るは惜しむべく、齢のかさなるはうれはしけれど、新しき年を迎ふるは、めづらかにてよろこぶべし。この頃は世の中の人何くれと忙はしく、せきあへず、多くのゝしりて走りまどふを、ひとり靜かに見る人はたのしむべし。一とせは、はかなき夢のこゝちして過ぎぬれば、後を顧みてせちになごり惜しむべし。老の身は月日もいとどたちやすく、何ほどもなき一とせなるを、數へ添ふるもうらめし。されど、人の世を經るは、思はずも變多きことなるを、一とせのうちわざはひなくて過ぎぬる人は、またたのしからずや。春・秋の暮れゆくだになごり惜しむべし。まいて一とせの終のけふの日の夕暮になりぬるをや。もろこしの人は「守歲」といひて、今宵はよもすがらいねずとかや。これふるきを送り、新しきを迎ふる心なるべし。送・迎につきて、憂・喜一かたならず。凡そ四つの時の推しうつる

をり〳〵につきて、感を起す人はなさけ深し。愁人はこれによりてかなしみ、達士はこれによりてたのしむ。景氣はおなじけれど、たゞ見る人から、艶にも凄くも思ほゆるなるべし。

花月草紙

松平定信

一　花のけはひ

なしときけば、ありといはまほしく、あしといふをば、よしとことかへていはんこそ、いとねぢけたることなれ。櫻てふ花は、わが國のものなるを、から國にもありとて、さま〴〵ためしなどひきつくれど、櫻かいたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふからうたもなければ、なしとこそいふべけれ。いでや櫻といはでしも、

花とだにいへば、こと木にはまぎれぬものを、ほの〴〵とあけゆく山ぎは、雲か雪かとばかり咲きみちたるも、霞こめたる夕まぐれ、花のけはひもおぼろに見えて、こゝにのみ暮れのこすけしきなどいふは淺かりけり。まいて、うてなののびやかなれば、近劣りするなどいふは、かのことかへてざえおふ心にいふことなりかし。風に散りかふも、雨に濡るゝも、遠山に見るも、軒ばにむかふも、曙も、夕暮も、露のひるまも、目かるゝ時しなきを、ことにわが國ぶりのすがたにて、枝もすなほに、花のかたちもゆたけく、にほひさへもこちたからぬも、あやしきまでにこそおぼゆるものなれ。さるを、いづこにもありといふはさらなり、曙・夕暮などと、おもしろからんやうにことばそふるは、いまだ深くそめし心にはあらざりけり。すべて、ことばもていひつくさんと思ふは、いと淺き心かな。

二　月のさしのぼる頃

月のさしのぼる頃、曙の空おぼえて、横雲のたなびきたるに、ややにほひそめたれど、遠山の梢にいざようて、姿も見えず、からうじてさしのぼりけり。梢のうさも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出できたるが、近よるほど、あやにくに、月のかたより雲のうちへかき入るやうに見ゆ。こはいかにせんとしばしうちまもるに、雲の端つ方あかう見ゆるにぞ、出ではなれたらば、はやかからんくまはあらじと思ふに、いつのまにか、また白雲の月待ちがほにたなびきて見ゆれば、胸うちつぶれてうち見るに、はじめの雲より出でたる光いとあたらしう見えて、ことにさやけし。かの待ちゐたる雲にむかへば、またはせ入るもいとつらし。月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず。こゝかしこに、それと面

雪・螢云々　晉の孫康と車胤との故事より出た語で、刻苦して勉學することをいふ。

五つのつね　五常、即ち仁・義・禮・智・信をいふ。

五つのみち　五倫、即ち父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あるをいふ。

影見ゆるにぞ、ひたすらにうらみはてで見ゐたるうちに、衣手もしめりゆきて、露も蟲の音もさかりなりけり。つくづくとむかひゐたれば、心のはてなきやうにこそおぼえしか。

三　道まねぶ人

「かの人は雪・螢あつめし窓の年を積みて、書見る道に心をつくしはべるなり。されば、世の中のことにはいと疎くはべり。」といへば、「さるこそまことの道まねぶ人なりけれ。」とほめものするものもありとや。もとより道まねぶものは、五つのつね、五つのみちよりして、人を治め、おのれを修むる道まねぶより外のことはなし。されば、世のことにさとく、今のあたりのみかは、千とせの前つ世のこと、見ぬもろこしの昔・今のさまより、盛り衰ふるきざし、人の心のうへより、仕ふる道のくさぐさにいたるまでも明らかなる

をこそ、道まねぶ人とはいふべけれ。この世のことに疎かにては、いかで道まねぶ人とはいふべからん。

四　雨の趣

旱天の雨はさらなり、草木の花咲き實のるも、みなこの恵にこそあなれ。またその感情の深さをいはば、今日は元日なりけりといふに雨そぼ降りて、霞みわたりたるは、げに春かなとぞ思ふめる。師走の晦ののどやかに降りたるも、春待ちがほにていとをかし。すべて春は雨こそのどかなれ。軒ばより霞みわたりて、いとこまやかに降れるが、衣うるほせども降るとは見えず。軒の玉水も間遠に音して、住みすてし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭の面の枯生の底に緑やゝそひゆくも、柳の絲の動きもやらで露そふも、ともにいとのどかなり。ともし火かゝげても、何となく光しめりたる

に、鐘の音のほのかに響きくるも心澄みわたりぬるものぞかし。その外梅が香のしめり、夜深くにほひわたるも、花にうしとかこちぬるもあはれはありけり。春も老いゆく頃、蛙の時えがほにすだくもをかし。

ほとゝぎすのはつ音いかにと思ふ頃、村雨のはら〱と降りいでたるも、五月雨の幾日も降りくらして、書の巻々繰返しつゝゐたれば、何となく世の中のことにも遠ざかりぬるこゝちぞする。また暑さにたへかぬる頃、雲のみなぎり出づる勢ありて、風一しきり吹きおちたるに、柳・蓮葉などの葉裏白く見せたるも涼し。やがておほきやかなる雨の間遠に落ちたるが、後にはしきりに降りきて、もの音も聞えず、土のにほひきたるもいとこゝちよし。軒ばは玉のすだれかけたらんやうに、玉水の絶えまなく落ちたるに、庭は一つ湖となりて、あるは瀧おとし、または水はしらせた

るに、人々しばしものいはでうちまもりゐたるもをかし。やゝ雲うすくなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へ躍り出でて餌拾ふさまなり。はじめ雲の立ちいでしかたは、はや空の一しほみどりに見えて、虹など見ゆるに、木々のみどりの庭たづみに影見ゆるもいと涼し。

秋來る頃の雨は、昨日にかはりて何となうさびし。荻の上風、外山の鹿の音など、月よりも身にしむこゝちぞする。常に聞きなれし筧の水の音までもあはれ深くこそ。月の前の村雨もまたをかし。まいてやゝ夜寒の頃、鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみにかすかなる聲して枕近く鳴きよるもあはれなり。この雨に木々も染みなんと思へば、「茸なども生ひいでなん。栗もはや落つべし。」など、わらはべのものさびしげにともし火にむかひつゝいひいづるもげにさま／＼なり。もみぢの染めそふも、白菊のうつりゆ

きてひとさかり見するも、尾花の露重げにうちしをれたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりもつき／＼し。朝顔の、みな枯れたる中に、さゝやかにあかう咲出でたるが、晝過ぐるまでも凋みおくれたる、またあはれなり。野分の風はおどろ／＼しきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがにあはれをそふるは秋のならひなるべし。

時雨のさと音して夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふもをかし。月よりも闇の夜よりもあはれ深きものにはべり。

五　ことわり

ことわりなきが、ことわりのまことなり。ことわりのごと行はるゝものならば、何のかたきこともあらじを、さも知らで、人と爭ひ、政をそしりなどして、たかぶるものは、ことわりのまことを知

らぬとやいふらん。

六　道知る心

四つの時のうつりゆくけしきこそ、またなくをかしきを、咲かざるをりの花を咲かせんとし、散る頃に散らさじと思ふはいとくるし。散ればまた來ん年は咲きぬべし。いかに心をくるしむとも、霜白く氷堅きをりに蓮の咲くべきことわりなし。されど、咲くを待ち、散るを惜しむは道なり。散るをもよそにして心とせぬは、道知らぬ心なるべし。

七　月なき夜半

月なき夜半は、いと心の底澄みまさるものなりけり。海のおもて暗うして、寄せくる波の音ゆたかにして、磯邊の松にも音せぬ

風の、袖にそよと吹きかふに、晝の暑さも忘れぬべし。秋はなほ蟲の音もきそひゆくに、千ぐさの花の色も見えて、沖漕ぐ船にまがふかりがねのわたるも、いづこなるらんとあはれなるに、浦のあしべに聲あはせたるもをかし。まいて曉頃に月の出づれば、宵の入日の殘れるたぐひにはあらず。海のおもて黄金の波の滿ちくるにぞ、ことばにものぶべしとは思はれぬ。昔いぎたなくて、有明の月にうとかりし頃もありけりと思へば、口をしきものから、また羨ましくも思へり。それより思の移りゆきて、げに古はあしき波にも舟うけて、鰹釣りしこともありき。またいと寒き頃、海に入りて鮑とりしこともありしが、今のわかうどは、まだきに老いぬるさまするものぞ多き。その頃の昔物語に聞けば、「浦わの戰のおそろしさに、妻子うちつれて深山へ入りし世もありき。」と聞きつるに、月なき空にも心のたのしびを極めぬるは、いかにぞや。かゝ

日に新なり

「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新。」（大學）

ることも、かのわかうどの老いたるさまするをも、あはせていはまほしけれど、また例の老いぼれの繰言いふとやむづかりなん。

八　日新の教

「おほよそ躬行にてもあれ、人事にあづかることにてもあれ、政にてもあれ、新なりといふ文字を忘るべからず。日に新なりといふはものかは、事々に新に、物々に新なるべし。昨日のことに馴れて思ひあやまるも、かねて知れることと思ひてやぶれとるも多し。かのかしこき人も女などに迷ひ、愚かなる人に欺かるゝも、一つ一つに新ならねばこそありけれ。昨日にくしと思ひしこと心にそみ、去年のうれしと思ひしこと心につきて離れねば、それより根ざして迷ふとか聞けり。げに日新の教こそ、よろづにかよはして、身を終ふるまでも忘るな。」と語りし老人もありけり。

九　家國のすがた

家國のすがたは、わか〳〵とあらまほし。もし年老いたるすがたになりもてゆけば、ものごとしづみはてて、人に見知られじと、もののいろめも花やかならざれと思ふまでになりゆくぞかし。その心よりして人に秀でんの心もとよりなりければ、ものの堪能上手も絶えはてぬるものとなん。

玉かつま　本居宣長

一　新なる説を出すこと

近き世、學問の道開けて、大方よろづのとりまかなひ、さとくか

しこくなりぬるから、とり〴〵に新なる說を出す人多く、その說よろしければ、世にもてはやさるゝによりて、なべての學者、いまだよくもとゝのはぬほどより、われ劣らじと、世にことなるめづらしき說を出して人の耳を驚かすこと、今の世のならひなり。その中には、ずゐぶんによろしきこともまれには出でくめれど、大方いまだしき學者の心はやりていひ出づることは、たゞ人に優らん勝たんの心にて、かろ〴〵しく、前後をもよくも考へあはさず、思ひよれるまゝにうち出づる故に、多くはなか〳〵なるいみじきひがごとのみなり。すべて新なる說を出すは、いと大事なり。いくたびもかへさひ思ひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきとほりて、たがふところなく、動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、ほど經て後に今一たびよく思へば、なほわろか

りけりと、われながらだに思ひならるゝことの多きぞかし。

二　道にかなはぬ世の中のしわざ

道にかなはずとて、世に久しくありならひつることを、俄にやめんとするはわろし。たゞそのそこなひのすぢをはぶき去りて、あるものはあるにてさしおきて、まことの道をたづぬべきなり。よろづのことをしひて道のまゝになほし行はんとするは、なかなかにまことの道のこゝろにかなはざることあり。よろづのことは、興るも、亡ぶるも、盛りなるも衰ふるも、みな神の御心にしあれば、さらに人の力もてえ動かすべきわざにはあらず。まことの道のこゝろをさとり得たらん人は、おのづからこのことわりはよく明らめ知るべきなり。

須賀直見 通稱は正藏。伊勢松坂の人。宣長の門人。

三　書を讀むことのたとへ

須賀直見は、廣く大きなる書を讀むは、長き旅路を行くがごとし。おもしろからぬところも多かるを經行きては、またおもしろく目ざむるこゝちする浦山にもいたるなり。また脚つよき人ははやく、よわきは行くことおそきも、よく似たり。」とぞいひけるをかしきたとへなりかし。

四　新にいひ出でたる説

大方世のつねにことなる新しき説を起す時には、よきあしきをいはず、まづ一わたりは、世の中の學者ににくまれ、そしらるゝものなり。あるはおのがもとよりよりきつる説といたくことなるを聞きては、よきあしきをあぢはひ考ふるまでもなく、はじめ

よりひたぶるに捨てて、取上げざるものもあり。あるは心のうちには、げにと思ふふしも多くあるものから、さすがに近き人のことにしたがはんことのねたくて、よしともあしともいはで、たゞうけぬ顏してすぐすたぐひもあり。あるはねたむ心のすゝめるは、心にはよしと思ひながら、その中の疵をあながちに求め出でて、すべてをいひけたんとかまふるものもあり。

しかれども、またまれ／＼には、新なる説のよきを聞きては、古きがあしきことをさとりて、すみやかに改めしたがふたぐひもなきにはあらず。古きをいかにぞや思ひて、かくはあらじかとまでは思ひよれども、みづから定むる力なくて、疑はしながらさてあるなどは、新なる説を聞きては、かくてこそはと、いみじくよろこびつゝ、たちまちにしたがふたぐひもありかし。

世の中のあげつらひ定まりて、皆人のしたがふ世になりては、

はじめよりすみやかに改めしたがひつる人は、かしこく心さとく思はれ、古きにかゝづらひて、とかく滞れる人は、心おそくいふかひなく思はるゝわざぞかし。

五　ひとむきにかたよることの論

世のもの知り人の他の說のあしきをとがめず、ひとむきにかたよらず、これをもかれをも捨てぬさまにあげつらひをなすは、多くはおのが思ひとりたるおもむきをまげて、世の人の心にあまねくかなへんとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人はいかにそしるとも、わが思ふすぢをまげて従ふべきことにはあらず。人のほめそしりにはかゝはるまじきわざぞ。大方ひとむきにかたよりて、他說をばわろしとがむるをば、心せばくよからぬこととし、ひとむきにはかたよらず、他說をも

わろしとはいはぬを、心ひろくおいらかにてよしとするは、なべての人の心なめれど、かならずそれさしもよきことにもあらず。よるところ定まりて、そを深く信ずる心ならば、かならずひとむきにこそよるべけれ。それにたがへるすぢをばとるべきにあらず。よしとしてよるところにことなるは、みなあしきなり。これよければ、かれはかならずあしきことわりぞかし。さるを、これもよし、またかれもあしからずといふは、よるところ定まらず、信ずべきところを深く信ぜざるものなり。よるところ定まりて、そを信ずる心の深ければ、それにことなるすぢのあしきことをば、おのづからとがめざることあたはず。これ信ずるところを信ずるまめごころなり。

六　學者のまづかたきふしを問ふこと

ものまなぶともがら、もの知り人にあひて、もの問ふに、ともすれば、まづ古書の中にも世にかたきこととして誰もとき得ぬふしをえり出でて問ふならひなり。かたきことをまづ明らめまほしく思ふも學者のなべての心なれども、さらば、やすきことどもはみなよく明らめ知れるかとこゝろむれば、いとやすきことどもをだに、いまだえよくもわきまへず。さるもののさしこえて、まづかたきふしを明らめんとするは、いとあぢきなきわざなり。よく聞えたりと思ひて、心もとゞめぬことに、思の外なるひが心得の多かるものなれば、まづたやすきことをいくたびもかへさひ考へ、問ひも明らめて、よく得たらん後にこそ、かたきふしをば思ひかくべきわざなれ。

七　書うつしもの書くこと

書きうつすに、おなじくだりのうち、あるは並べるくだりなどに、おなじことばのある時は、見まがへて、そのあひだなることばどもをうつし洩らすこと、つねによくあるわざなり。また一ひらと思ひて、二ひら重ねてかへしては、そのあひだ一ひらを、みながらおとすこともあり。これらつねに心すべきわざなり。またよく似て、見まがへやすき文字などは、ことにまがふまじく、たしかに書くべきなり。これはうつしがきのみにもあらず、大方もの書くに心得べきことぞ。

すべてものを書くは、事のこゝろを示さんとてなれば、おふなおふな文字定かにこそ書かまほしけれ。さるを、ひたすら筆のいきほひを見せんとのみしたるは、いかなることとも讀みときがたきが世に多かる、あぢきなきわざなり。つねに書きかはす消息文なども、文字讀みがたくては、いひやるすぢゆきとほらず、讀む

人はたくるしみて、かしらかたぶけつゝ、かへさひ讀めども、つひに讀みえずなどしては、こゝ讀みがたし。」とかへし問はんも、さすがになめきやうなれば、たゞおしはかりに心得ては事たがひもするぞかし。

八　手書くこと

よろづよりも、手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ、學問などする人は、ことに手あしくては、心劣りのせらるゝを、それ何かはくるしからんといふも、一わたりことわりはさることながら、なほあかずうちあはぬこゝちぞするや。

宣長いとつたなくて、つねに筆とるたびに、いと口をしう、いふかひなくおぼゆるを、人のこふまゝに、おもなくたんざく一ひらなど書きいでて見るにも、われながらにいとかたはに見ぐるし

う、かたくななるを、人いかに見るらんと恥づかしく胸いたくて、若かりしほどになどて手習はせざりけんと、いみじうくやしくなん。

九　花のさだめ

花はさくら。櫻は山櫻の葉あかく照りて細きが、まばらにまじりて、花しげく咲きたるは、またたぐふべきものもなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて、花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大方山櫻といふ中にもしな／＼のありて、こまかに見れば一木ごとにいさゝか變れるところありて、またくおなじきはなきやうなり。すべて曇れる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず。松も何も青やかに茂りたるこなたに咲けるは、色はえてことに見ゆ。空清く晴れたる日、日影のさすかたより見たるは、

ありて世の中は云々　「残りなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はてのうければ」（詠人不知。古今集）

にほひこよなくて、おなじ花ともおぼえぬまでなん。朝日はさらなり、夕映も。

梅は紅梅。開けさしたるほどぞいとめでたきを、さかりになるまゝにやう〱しらけゆきて、見どころなくなるこそ、いと口をしけれ。櫻の咲ける頃までも、散ること知らで、むげににほひなくねびれしぼみて残りたるを見れば、げにありて世の中は何事もみなかくこそと、見る春ごとに思ひ知らるかし。白きはすべて香こそあれ、見る目はしなおくれたり。大方梅の花は、ちひさき枝をものに挿して近く見たるぞ、梢ながらよりはまされる。

桃の花は、あまた咲きつゞきたるを遠く見たるはよし。近くてはひなびたり。山吹・かきつばた・なでしこ・萩・すゝき・をみなへしなど、とり〲にめでたし。菊もよきほどにつくろひたるこそよけれ。あまりうるはしくしたゝかにつくりなしたるは、なか〱にしなく、なつかしからず。つゝじ、野山に多く咲きたるは、目さむるこゝちす。海棠といふもの、からめきて、こまやかにうるはしき花なり。

そも〱かくいふは、みなおのが思ふ心にこそあれ。人はまた思ふ心ことなるべければ、ひとやうに定むべきわざにはあらず。また今やうの世の人のもてはやすめる花どもも世に多かるをかぞへいでぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にもよみたらず、古きものにも見えたることなきは、心のなしにや、なつかしからずおぼゆかし。されど、それはたゞひとやうなるひが心にやあらん。

一〇　道を説くこと

道を説かんに、儒にまれ、老にまれ、佛にまれ、まれ〱に心ばへ

のかよへるところのあるをとらへて、おのが心のひくかたにまかせて、かよはぬところをもすべてそのすぢにひきよせて說きなし、あるはまたあだし道とおなじからんことを厭ひ避けて、ことさらにけぢめを見せ、さまをかへて說かんとする、これらみないとあぢきなく、しひたるわざなり。似ざらんも、似たらんも、ことならんも、おなじからんも、とにかくにあだし道のこゝろにはいさゝかもかゝはるべきわざにあらず。またかく說きたらんには、世にうけひかじ、かくいひてこそ人は信ぜめなど、世の人の心をとりて、いさゝかも說きまげんことは、またいとあるまじく、心ぎたなきわざなり。すべて世の人のほめそしりをも思ふべきにあらず。たとひあだし道々とはうらうへのたがひあり、世にも絕えて信ずる人なからんにても、たゞ神の御書のおもむきのまゝにこそは說くべきわざなりけれ。

二　今の人の歌文ひがごと多きこと

近き世の人のは、歌も文も大方はよろしと見ゆるにも、なほひがごとの多きぞかし。されど、そのたがへるふしを見知れる人はた世になければ、たゞかいなでにこゝかしこえんなることばをつかひ、よしめきてよみなし、書きちらしたるをば、まことによしと見て、人のもてはやし、ほめたつれば、心をやりてしたり顔すめる、いとかたはらいたく、をこがましくさへぞ思はるゝ。

さるにつけては、かくいふおのがものすることも、なほいかにひがごとあらんと、ものよく見知れらん人の心ぞ恥づかしかりける。人のひがごとのよく見えわかるゝにつけては、われはよくわきまへたれば、ひがごとはせずと思ひほこれど、古のことのこころをさとり知るすぢはかぎりなきわざにしあれば、この外あ

らじとはいとなん定めがたきわざなりける。

三　道のひめごと

いづれの道にも、その大事とて、世に廣く洩らさず、ひめかくすこと多し。まことにその道大事ならば、ことに世に廣くこそせまほしけれ。あまりに重くして、たやすく傳へざれば、せばくなりて、絶えやすきわざぞかし。そもみだりに廣くしぬれば、その道輕々しくなることといふなるも、一わたりはことわりあるやうなれども、たとひ輕々しくなるかたはありとても、なほ世にひろまるこそはよけれ。廣ければ、おのづから重きかたはあるぞかし。いかに重々しければとても、せばくかすかならんは、よきことにあらず。まして絶えもせんには、何のいふかひかあらん。

三　足ることを知るといふこと

足ることを知るといふは、もろこし人の常にいみじきわざにすめることなるを、これまことにいとよきことにて、しか思ひとらば、ほど〳〵につけて誰も〳〵心はいと安かりぬべきわざにぞありける。しかはあれども、高きみじかきほど〳〵に望み願ふことの盡きせぬぞ世の人の眞情にて、今は足りぬとおぼゆる世はなきものなるを、世には足ることと知れるさまにいひて、さる顏する人の多かるは、例のからやうのつくりごとにこそはあれ。まことに清くしか思ひとれる人は、千よろづの中にもありがたかるべきわざにこそ。

四　山林を住みよしといふこと

世々のもの知り人、また今の世に學問する人などもみな、すみかは、里とほく、しづかなる山林を、住みよく、好ましくするさまにのみいふなるを、われはいかなるにか、さらにさはおぼえず。たゞ人げしげくにぎはしき所の好ましくて、さる世ばなれたる所などは、さびしくて、心もしをるゝやうにぞおぼゆる。さるは、まれまれにものして、一夜旅寝したるなどこそは、めづらかなるかたに、をかしくもおぼゆれ。さる所につねに住ままほしくは、さらにおぼえずなん。

人の心はさま〳〵なれば、人うとく、しづかならん所を住みよくおぼえんもさることにて、まことにさ思はん人も、世には多かりぬべけれど、また例のつくりごとの、からぶりの人まねに、さいひなして、なべての世の人の心とことなるさまにもてなすたぐひも、中にはありぬべくや。かく疑はるゝも、おのが俗情のならひ

にこそ。

一五　一言一行によりて人の善悪を定むること

人のたゞ一言たゞ一行によりて、その人のすべてのよきあしきを定めいふは、からぶみのつねなれども、これいとあたらぬことなり。すべて、よき人といへども、まれにはことわりにかなはぬしわざもまじらざるにあらず、あしき人といへども、よきしわざもまじるものにて、生けるかぎりのしわざ、こと〳〵によきあしき一かたに定まれる人はをさ〳〵なきものなるを、いかでかはたゞ一言一行によりては定むべき。

一六　古よりも後の世のまされること

古よりも後の世のまされること、よろづの物にも、事にも多し。

その一つをいはんに、古は橘をならびなきものにしてめでつるを、近き世には蜜柑といふものありて、この蜜柑にくらぶれば、橘は數にもあらずけおされたり。そのほか、柑子・柚・九年母・橙などのたぐひ多き中に、蜜柑ぞ味ことにすぐれて、中にも橘によく似て、こよなくまされるものなり。この一つにておしはかるべし。あるは古にはなくて、今はあるものも多く、古はわろくて、今のはよきたぐひ多し。これをもて思へば、今より後もまたいかにあらん。今にまされるもの多く出でくべし。今の心にて思へば、古はよろづに事たらずあかぬこと多かりけん。されど、その世にはさはおぼえずやありけん。今より後また、物の多くよきが出でこん世には、今をもしか思ふべけれど、今の人事たらずとはおぼえぬがごとし。

鈴屋集

本居宣長

一　月前の納涼

水無月の二十日のほど、大方もこの頃は、暑さ所せきほどなるを、まいて朝より塵ばかりも曇なく照りはたゝく日影の西日になるほど、よにたへがたくて、思ふどちうちとけたる物語をだにしてまぎらはさばやと思ひて、むつましくあひ語らふ友だちのもとにものしつ。

南おもてなる所、伊豫簾かけわたし、あたり〳〵いとさはらかにしつらひたる、いと涼しげなるに、夕風待ちとるべき端つ方についゐたるに、かつ〳〵暑さも忘るゝこゝちして、簀子の端に出

でて見いだせば、庭の梢どもいづれとなく茂りあひたるものから、木だちうとましからぬほどにつくろひなして、このもかのもに、はかなき柴垣なつかしく結ひわたしなど、しめやかに見どころあるさまなり。夕つけゆくほど、軒近き呉竹の下風、心もとなきほどにうちそよめきたるも、あかぬこゝちのみぞせらるゝ。

やゝありて同じ心なる人、またふたりみたりなん來あひたる。あるじなさけある人にて、庭のたて石などに水そゝがせたる夕立のなごりおぼえて、木々の下枝うちなびきて落つるしづくもいひ知らず涼しく見ゆ。やう〳〵うちと暗くなりゆくに、「今宵は燈籠にてをありなん。」と前栽のしげみに立てるに、火入れたる、ほのかなる影に青葉の露きら〳〵と見えて、おなじく吹く風もことに涼しくぞおぼゆる。夏の月なきほどは、庭の光なき、いとむつかしくおぼつかなきものなるに、この光なからましかば、いとも

むとく　無德。無益に同じ。

ふる川のべの云々　―涼しさは秋やかへりて初瀬川ふる川のべの杉の下かげ―（藤原有家。新古今集）

ののはえなからましをとて、皆人めであへるに、あるじのしたり顔なるもことわりなりかし。

かくて宵すぐるほど、こだかき松にほのめく影は、月出でたるならんとて、東のつま戸うち開きて待つほど、とばかりありていと花やかにさし出でたるは、また似るものなく涼しくおもしろきには、燈籠の光も今ぞむとくにけたれにたる。風さへいとひややかにうち吹きたるは、「ふる川のべの杉の下蔭ならねども、秋やかへりて」など、うちずしのゝしる。大方月は秋をこそめでたき時に古よりいひおきたなれど、この頃の空に、かくて待ちいでたるほどよ、たとしへなく心も澄みて、もののむつかしさもこよなくまぎるゝわざになん。

二　雪のあした友のもとへ

今朝のけしきめづらしくは御覧ぜずや。あけくれ心隔てぬ友どちはかゝらぬをりだに何事につけてもまづ思ひ給へ出でらるゝわざなるを、ましてかくめづらかなる朝ぼらけを、心なき身のひとりのみ見はべらんことの、いとあたらしく思ひ給ふれば、よし跡つけても人の訪ひ給はましかば、こよなくをかしさもまさりぬべきものと思ひ給ふるに、いかに」とだにおとづれもし給はぬは、いと思はずに怨めしくなん。そこには、いかに見どころあるこゝろ深きことのは多くものし給ふらん。一つ二つ賜はせよかし。さてなんせばき庭の雪の光も加りて、友なき今朝のさうざうしさも慰めはべらん。

三　述懐

昨日は今日の昔にて、はかなくのみ過ぎにすぎゆく世の中を、

つく〴〵と思へば、あはれわが世もいくほどぞや。手を折りて數ふれば、はやみそぢにもあまりにけり。命長くてなゝそぢやそぢ生けらんにてだに、はやくなかばは過ぎぬるよと思へば、まだよごもれるやうなる身も、ゆくさきほどなきこゝちのして、心細くぞおぼゆる。

かくのみはかなく、こゝろなき木草・鳥けだもののおなじつらに、何すとしもなくあかしくらしつゝ、生けるかぎりの世をつくして、いたづらに苔の下に朽ちはてなんは、いと口をしくいふがひなかるべきことゝ思ふにも、よろづにいたり少く、つたなき身にしあれば、何事をしいでてかは世の人にも數まへられ、なからん後の世に朽ちせぬ名をだにとゞめましと、いとど人に似ぬ愚かささへとりそへてぞ、かなしく心うかりける。さりとてはた、身をえうなきものにはふらかしはつべきにしもあらず。かくのみ

描く愚かなる心ながら、何わざにまれ、怠りなくわざと心にいれてつとめたらんには、つひには一つゆゑづけて、なのめにしいづるふしもなどかはなからんと、あいなだのみにかゝりてなん。

梅園叢書

三浦梅園

一 毀譽

毀譽は人の大節なり。世こぞりて譽むるも、かならず察すべし。人こぞりて毀るも、かならず察すべし。いはんや一人は譽め、一人は毀るをや。たとへば訟事あらんに、兩方ことわりなりと思へばこそ、互にいひつのりてやまざるものなれ。これを奉行のさばかんに、とかく一人は勝ち、一人は負くべし。勝ちたる人は奉行を譽

薗原 下伊那郡。

め、負けたる人は毀ることとなり。また惡しき人なりとも、それに伴なふ人は、これを善しと思へばこそ交はるなれ。わが善しと思ふをば譽め、わが惡しと思ふをば毀る習なれば、その毀譽によりて、その人の善惡も分ちがたし。

信濃の國薗原といへる所に木あり。遠くより見れば、帚の形のごとし。よつてこれを帚木といふ。されど近づきて見れば、帚に似たるところもなく、うち茂れりとかや。まことに遠くより見聞くと、親しく見聞くとは、多くはこの帚木のごとくことなるべし。凡そ人のものを批判するも、わが好むところをこそ譽むるものなれ。俠士に歌よむ人の評判せさせ、日蓮宗に眞宗の評判せさせんに、いかでか公論あるべき。おなじ道を二人して行かんに、一人はすこやかにしてこの道近しといひ、一人は疲れて遠しといはん。これ道に違あるにあらず、心に違あればなり。

二　人の子の育てやう

人の子を育てんも、ありのまゝにして、をしへなからんは惜しきことなり。五穀も植ゑたるまゝにて、くさぎることもなく、培ふこともなくば、かならずよくはみのるべからず。とかく手を入れてだによくみのることはまれなるものなり。生まれつきよしとてをしへざるは、よき刀とてねたばつかぬがごとし。よき刀のうへにねたばつきたらんには、なほ〳〵よくきれぬべし。生まれつきうつくしからん人も、裸になしていだしたらんには、文なくぞあるべき。うつくしき人に、うつくしく衣紋引きつくろひたらんこそ、ほいなるべけれ。よきといふに限りなく、理に窮りなければなり。また愛に溺れて、わきの人の指南さへ、親の心にはひがごととおぼえ、たゞさむからん、ひもじからんとのみいひ思ひ、そのわ

司馬溫公　支那、宋代の政治家、學者。

がまゝ、氣まゝもやがてなほらん、ひととならば家事にももとづくべしとおもふうち、月日は人を待たねば、はや指南の頃もすぎぬ。心ありてよきことといふをば、かれを憎むと心え、あからさまにそしり憎む。これ劍のうへに蜜を塗りて小兒に與ふるごとし。一旦あまく快しといふとも、つひには舌をやぶるべし。

三　誠

一勺の水を海に入れて、海の水増したりとはいはんは愚かなり。増さずといふは妄なり。水を加ふるところは我にして、増すと増さざるとは我にあらざるものは、しひてその辨をもとめずして可なり。我に在るところの誠をつくす、これ君子の道なり。

誠とは、うそをいはざることとのみ心えたらんは愚かなることとなり。或人、司馬溫公に誠に入る道を問ひければ、「妄語せざるよ

り入る。」といへりとぞ。なるほど、妄りに語らず、うそをいはぬより、誠の道には入るなれども、うそをいはぬを誠とはいはぬなり。僞をいはぬに對する信は小さし。僞なきに對する誠は大なり。罌粟の子・煙草の實は至つて小さきものなり。地に落さば目にもかゝらぬやうなれども、内に一つの誠といふものありて、奪ふべからず、隱すべからず、味ますべからず、蔽ふべからず。その時いたるに及びては、芽を出し、葉を生じ、花を開き、實を結ぶ。その子を水に腐らし、火にやきて芽を出さずといふは、その子の尤ならんや。これによりて物の子を實といふは、實は卽ち誠なり。一つも誠ならざるものありて、腐れたるものは生ぜず、痛みたる苗瘁く。人の誠もなほかくのごとし。つね〴〵心にかけて掃灑したらん座席と、俄に蜘のいとり、柱ふきたらんは、いかでか見まがふべき。人平生をたしなまずして、その期に臨み、僞にかざらんは、まことの俄掃除

僞も云々　「後撰集」卷十一には「なき名ぞと人にはいひてありぬべし」云々とある。詠人不知。

なるべし。「如見其肺肝。」とて、人欺くべからず、わが心を欺くなり。

僞も人にいひてはやみなまし心のとはばいかゞこたへん

この歌のごとく、人をば欺くべけれども、心に心をかへりみて、いかに今のごとく誠ならざることをばせしぞ、いひしぞ、人をば欺くに、などてみづからの心をみづからは欺けると咎めたらんには、みづから恥づかしくなり、ひとりゐても額より汗出づべし。

閑田文草

伴蒿蹊

一　春の曉

鶏の八聲もわきて花やかに聞きなされて、年立ちかへる空の

後にや風の云云

「霞みつゝ花散るみれの朝ぼらけ後にや風のうさも知られん」(宜秋門院丹後。續古今集)

光は、岩戸のひま見えそめしむかしもかくやと心浮きたつなん、若き時にはかはらぬやう〳〵如月となりては、野山の梅咲きいでぬらん、川ぞひ柳もみどりならん、明けはてばとく霞をわけてなど思ひて、うぐひすのねぐらながらの聲待つほどのこゝちまたたのし。まいて花よりしらむ彌生の山のながめ、「後にや風のうさも知られん」と聞えし散りがたのけしきなど、これがために旅寝せしところ〴〵も思ひいでぬるをりは、たまも身にそはずこそ。

二　冬のこゝろ

花咲き實なりし木も紅葉をかぎりに冬がれ、木の芽はるさめも時雨にかはり、それもいつしか染めぬべきものなくなりぬれば、みぞれにうつりて雪とつもる。一とせの月日は隙行く駒のほ

少壯いくばく時ぞ云々

「少壯幾時兮奈老何。」(漢武帝、秋風辭)

前の車の云々

「周書曰、前車覆後車戒。」(説苑)

冬は歳の餘り

「冬者歳之餘、夜者日之餘、陰雨者時之餘。」(魏略、董遇)

老いては云々

「丈夫爲志、窮當益堅、老當益壯。」(後漢書)

どもなきかな。

振分髮のうなゐ子がおとなしくなりぬといはれしなん、やがて老のはじめにて、終に髭髮の白くなりぬるをしもつく〴〵と思ひくらべて、埋火のもとにのみうづくまるを、若き人々はさこそ見ぐるしと思ふらめ。われもまたしかぞありし。「少壯いくばく時ぞ、老をいかん。」とからうたにも聞ゆるを、いたづらに朽ちはてぬることの、今さらに悔ゆるもかひぞなき。前の車のくつがへるを後の車のいましめてふこともあり。われにならひ給ひそよ。「冬は歳の餘り。」ともいふを、「この頃の雪をあつめ、長き夜を空しくないね給ひそ。」といはまほし。「老いてはます〳〵壯なるべし。」と勇みし人は、おのがたぐひにはあらず。たゞ寒きにたへねば、ひたやごもりにこもるほどに、ねぶりは宵よりきざして、しかも夜深くは目ざめぬ。

今年も云々　「老の波こえける身こそあはれなれ今年も今は末の松山」（寂蓮法師。新古今集）

冬もうし、老もうし。こは、老の心をうつすとやいはん、冬の心をうつすとやいはん。

三　年を惜しむ

はじめあるもののをはりあることわりは、知らぬ人もなけれど、あふをよろこび、わかれを悲しむは、かしこきも愚かなるもかはるところあらじかし。四つの時のついでも、花は根に、鳥は古巣に歸るをはじめて、みそぎにすつる夏の夕暮、蟲の音のかれ〴〵に尾花が袖のしをれゆくも、みなあはれなるにとりて、一とせのつひに暮るゝこそ、いはんかたもなけれ。老いぬれば何事につけても心弱きものから、「今年も今は末の松山」とうち唱ふるも袖に浪こそ越えぬれ。

松屋文集

藤井高尚

一　五月雨

むぐらの宿はさらぬ時だにさびしきならひなるを、五月雨の日を經れば、いとどいぶせさも勝りて、たけきこととは空をのみうちながめつゝ、「はれまなしや」といふぞ、この頃のことぐさなりける。ほどなき庭に草も高くなり、柴垣などもうちよろぼひて、ただ軒にかけたる蜘蛛の絲に玉をぬきとめたるのみぞ、はかなき宿の光にて、いさゝかつれ〴〵まぎるゝ見ものになんありける。

二　荻風

心づくしなる秋　「木の間よりもりくる月のかげ見れば心づくしの秋は来にけり」（詠人不知。古今集）

秋のはつ風待ちとるたよりにとて、みぎりに荻を植ゑおきたるに、年々にひろごりつゝ、軒をあらそひて生ひのぼれば、うたて所せうもしげりゆくかなと、はて〴〵はいぶせきまでに思はるるに、風のやどりになりてうちそよめけば、聞くたびにもの思ひもよほさるゝもいとどわびし。さりとて、この音なからましかば、長き夜の寝ざめまぎるゝかたなくさびしからまし。げに昔人もいひしごと、とにかくに心づくしなる秋にぞありける。

三　硯に書きてそふる

よろづの調度など、目なれぬさまにやうかへてつくりたるは、今めかしきにしばしは目とまれど、よく見れば、そばつきざればみて心劣りし、昔やうにてうるはしきは、うはべはきえて見ゆれど、やう〴〵に見まさりするものなりかし。それよりも人の力い

さらぬわかれ　「おいぬればさらぬわかれのありといへばいよいよ見まくほしき君かな」（在原業平の母。伊勢物語）

千とせもと云　「世の中にさらぬわかれのなくもがな千代もと祈る人の子のため」（在原業平。伊勢物語）

れつくれるところの少く、おのづからなるは、なほまされりけり。たとへば、いみじき庭つくりのつくれるも、廣く大きなる海山のけしきにはおよばず、すぐれたる上手の心とゞめてものしたるも、けづり花はまことの花に劣れるがごとし。

四　さらぬわかれ

菊の花のさかり久しきも、朝顔の夕かげ待たぬも、おくれさきだつしばしのほどのことにて、枯れゆく惜しさはおなじきがごとく、命ながかりし人とても、さらぬわかれのおろかならんやは。今年うせ給ひし母君のよはひよ、なゝそぢに三つやあまり給ひけん。「ことわりのよはひのときいたりしなれば、深くはな歎きそ。」と人はいさむれど、千とせもといのりし心には、さることわりもたどられず、さしあたりてはまたたぐひなきやうに思ひまどは

いまひとしほの

「ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり」（源宗于。古今集）

れてなん。

五　松

「いまひとしほの」と昔人のいひしは、げにさることにて、いつともわかぬ松の葉のみどりも、春のはじめ雪消ゆるより色そひて見ゆるなん、またくいみじき。夏は吹く風の浪の音にまがふもひややかなるこゝちするに、日をさへて下すゞみいひしらず。秋は葉ごしの月影ことにさやかに見え、冬は雪のつもりたるさまいはんかたなく、なべての木とひとしなみにやは見ゆる。かくをりふしにつけてをかしく見どころあるこの木しも、千とせのものにて、人のよはひながかれとてのねぎことにもまづためしにいひ出で、これが根にあるくすりの老をたすくるなど、よろづたらひめでたく、いさゝかもなんずべきくさはひまじらざりけり。あ

散るぞめでたき

「殘りなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はてのうければ」（詠人不知。古今集）

なをかしの木や。

年々隨筆　石原正明

一　散るぞめでたき

「散るぞめでたき」と詠みしもことわりなり。櫻のさかりはたゞ二日三日ばかり、あまりあへなきこゝちはすれど、また來ん春はと心いられして待たるゝも、久しからぬゆゑぞかし。唐桐といふものの、葉のさま涼しげに、花の色いとめでたけれど、夏のなかばより秋過ぐるまで、たゞおなじさまに咲きたるにあきはてて、とく枯れよかしとさへぞ思はるゝや。

おきまどはせる　「心あてに折らばや折らん初霜のおきまどはせる白菊の花」（凡河内躬恒。古今集）

なにがし　服部嵐雪。

二　菊

から國にては菊は黄なるをめづめり。詩どもにも黄菊・黄花などぞ聞ゆる。皇國には「おきまどはせる」と霜によそへしよりはじめて、白きをむねといひならはしたり。げに手をつくしたるくさぐさの色よりも、白菊・黄菊のいたく大ならず、また小さくもあらぬを、わざとつくろひなどもせで咲かせたるこの園の中など、そこらの松蔭ににほひみちたるこそをかしけれ。そが菊とは黄菊のことなりといふ。さることにや、なにがしとかや聞えし連歌師の句に、

黄菊白菊その外の名はなくもがな

さることなり。

三　夕と朝

ゆふべやまさりたらん、村雨なごりなくはれ、風いと涼しうて、山のはの雲いと白う、わざとならずところ〳〵にかゝれるに、いさよふ月の今出づべきにやあらん、にほひうつりて見ゆる。あしたやまさりたらん、峰の松原こきみどりなるに、茜の色もゆるやうにて、日のなからばかりさし出でたる。

四　鳥獸

鳥獸は鳴く聲に遲速・緩急・大小・高低ありて、喜怒哀樂の勢をうつすなるが、つぶ〳〵と物語するばかり下の情の通ずるものなり。おのがどち通ふことばありて、鳴きつゝ物語するにはあらず。鹿・雀・雲雀・鴿・雉などの、笛によるにてしるし。笛の音に言語あるべ

公冶長　孔子の弟子。

きにはあらねど、遅速・緩急・大小・高低をうつすゆゑ、鳥獸もしかぞと思ひて寄るなり。公冶長が鳥語に通じたりといふ說は、よしなきことなり。

五　學者の心得

學問にこゝろざしある人は、古と今とかはり來しありさまを、よく知りえんと心がくべきわざなり。古の事、今より見てはいとけしからぬ沿革あるものにて、事によりては、ゆくへも知らずうつりきたるものあり。さるをたゞ文章のうはべと、今の世のさまとを思ひあはせて、大方にのみ心えをるゆゑ、かすめる夜半の月見るやうにて、おぼ〳〵しきことのみなり。

六　隨筆

隨筆は見聞くこと、いひ思ふこと、あだごとも、まめごとも、よりくるにしたがひて書きつくるものにしあれば、つねにはいとよく知りをることも、忘れてはひがごといひ、淺まなる考どもも立ちまじり、文章も艶にこまやかには、ふとえ書きとらで、こち〳〵しく拙きことなどもありて、さまあしきものながら、さるつくろひなきものなるゆゑ、心いき、才のほど、器のかぎりも見えて、なかなかおもしろきものなり。

橿園文集

中島廣足

一　春の月

梅はとくうつろひて、櫻はまだしきほど、つれ〳〵とながめく

しくものもなき云々「照りもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき」（大江千里。新古今集）

ちゞの黄金「春宵一刻直二千金一。花有二清香一月有レ陰。」（蘇東坡）

らしたる空に、めづらしくさし出でたる月のにほひ深う、そこはかとなく霞みあひたる梢どものいとどなまめかしう、身にしみておぼゆるは、げにしくものもなき夜のさまになん。更けゆく風はまだいと寒きに、すだれはおろしたれど、いも寝られず、やうやう夜も短きほどおぼえて、山寺の鐘の音におどろきがほなる鴉の聲もをかしう聞ゆ。立ちいでて見れば、入方の空はいと深う霞みて、月のゆくへもたど／＼しきに、少しあかりゆく山ぎはのけしきは、まことにちゞの黄金にもかへつべくなん。

二　蚊遣火

晝のほどの暑けさは、水の上さへむとくにて、いとたへがたかりしを、やう／＼日影もかたぶきて、木の間よりそよぎ出づる風のいと涼しきに、ゆあみなどして立ちいづれば、月の影さへほのめきて、晝の苦しさも、かつ／＼忘られぬ。やゝ遠く行くほどに、道の傍なるしづが伏家より煙のいとしげく立ちのぼるは、蚊遣ふすぶるにやと思ふに、大きなる火桶に、何にかあらん、青やかなる木の葉をいと多くさし入れて、こなたかなたあふぎちらすはいとあつかはしく、見る目もいぶせくて、急ぎ歩みすぎて見れば、やうやう薄らぎゆく煙の、杉の梢にたなびきたる、霞おぼえてをかしきに、かはほりさへ三つ二つ飛びかひたる、繪にもかかまほしきけしきになん。

少納言の筆すさび「火などいそぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし。」（枕草子）

三　埋火

「いと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。」と少納言の筆すさびにものせられたる、げにさることにて、冬はたゞこれのみぞ、まらうどのあるじまうけにもなりぬめり。

齒固　齒固餅の略。新年に食ぶ餅。

雪降りつみたる日、かねてちぎりしを訪ふに、思ひしもしるく南面清くはらひて、すだれ高くまきあげたり。大きやかなる火桶の、よきほどにうづめる火に、やがてさしむかひたるこゝち、いみじううれしく、いたり深きあるじの心も思ひ知られぬ。今もうち散るを見つゝ何くれの物語するほど、なほ炭をとて取出でたる、手づからさしそふるもをかしきに、大きやかなる齒固など取出して、「やがてこれにて燒きてこそは。」といふに、雪の寒けさもかつがつ忘られてなん。

四　をのことあらんもの

をのことあらんものの、家にのみやはと心たけく思ひたちしも、日かずを經るまゝにいとこひしう、今も立ちかへらまほしきここちするを、しひてねんじて經めぐるに、いつしか年月もかさなりぬ。

五　黄昏

遠山寺の入相の鐘、ねぐらに歸る夕鴉もいつしか聲しづまりて、むかへる書卷も見えずなりゆくに、心ゆくわたりはいと口をしきものから、しばしうちおきて、端の方に出づれば、暮れのこれる梢どもの、ほのかなる山の端にはつかにあらはれたる三日月の影こそいとをかしけれ。青鷺とかやいふ鳥の、あやしき聲に鳴きゆくが、何となくものさびしげなるを、來んといひつる友はた暮れすぐしてやと思ふも心もとなきに、ともし火かゝげたるこそまづうれしけれ。

六　驛路

治れる世は、驛路の行きかひもにぎはしく、人宿す家はた建てつゞけて、草引きむすぶ思もなきものから、さすがにうちとけてしも寢られぬは、旅路のならひなるべし。曉の鐘はいづこもおなじ響にて、いととく立ちいづる旅籠馬のこゑ〳〵、枕上に聞えてこゝちよげなるに、「今日は天氣もよかんなり。なにがしの浦のながめ、いかにをかしからまし。かしこの御社にもこたびこそは。」などいひつゝ、さゝやく音のほのかに聞ゆるは、あなたに寢たる旅人なるべし。家なる人々も起出でて、朝げのことなど、とかくまかなひありくほど、やう〳〵もの騷がしくなりて、物擔ひゆく男どもの俚謠うたふなど、忙はしげに聞ゆ。とばかりありて、門のもとに引寄せつゝ、「馬まゐりて候。」といふは、わが乘るべきにやと思ふもいとをかし。

七　漁村

海人のすみかばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊の、風もたまらぬ松蔭などに、たゞかりそめに造りたる藁屋どものさま、波うち寄せなば、やがて流れもうせぬべう、いとはかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なか〳〵にをかしきものから、さて住まひなば何ごこちかせましと、思ひやるだに心細し。

夕つ方など、年老いたるをのこの手がらみしたるが、磯邊に立ちて、「今日はいと遲くもあるかな。」などいひつゝ、沖のかたをまぼりをり。うまごどもにやあらん、まさごの上を走りありきつゝ遊びゐたるに、入日さしたる島蔭より三つ二つ歸りくる舟の、舵ひき折りてほこらしげなるを、老人待ちえがほにうちほゝゑみた

るは、さち多かりしにやと見ゆ。渚に寄せて飛下るゝまゝに、綱繰りよせなど、とかくしつゝのゝしるに、男も女もあまた出できて、大きなる籠に魚ども取入れつゝ、擔ひもて行くさま、さはいへどにぎはしげなり。くゞつめくものもて來て、ちひさき魚三つ四つ乞ひもて行くわらはなどもあり。すべて人多く立ちこみ騷ぎて、舟のあたりかしがましく、さし寄りてのぞくべうもあらず。いと長き網の、渚にかけ干したるを繰りためて取入れなど、やうやうしづまりゆけば、こなたかなた火ともしたる透影、壁もあらはにて、いとあはれに見ゆ。

曉方、隣の家々目さまして、なりはひのことどもなるべし、あやしう聞知らぬことどもを、おのがじし聲高にいひかはしたるげに海人のさへづり、めづらしうも、をかしうも。

八　夜學

寺々の初夜の鐘の響もをさまりて、皆人も寢たるに、いとうれしう、ともし火あかくかくしなして文机にうちむかひたる、いみじう心澄みて、晝見たりしあたりの、何心なくて過ぎにしも思ひ知られて、深き心ばへあるくだり〳〵も、おのづから解きえらるるかし。かゝげつくしても、なほねぶたさも知らず、油さしそへつゝ見もてゆくに、遠き世の人も、たゞさしむかひ語らふこゝちす。册子つくりて、をかしきふし〳〵、あるはふと思ひえたることなどをば、墨おしすりつゝ書きつけなどするもをかし。鷄の聲は、夜深きにやと思ふに、いとゝく明けはなれたる、しばしとてうちねぶる夢のうちも、あだしごとならんやは。

九 書

夏の日の暮れがたきをも知らず、冬の夜の長きをもおぼえぬは、書見る心のたのしさになんありける。さるは、道々しきすぢのはさらなり、家々にしるせる何くれの書、またかりそめの筆すさびなど、から・やまと・古・今と、いとさま〴〵多かる中に、わが立てたるすぢならぬも、見もてゆくまゝには、えうあることどもありて、かにかくにあかずおもしろくたのしきは、書にしくものまたなかりけり。遠き世のを見るほどは、われもその世にあるこゝちして、やがてその人々を友となして、うち語らふこゝち、さへせらるるを、われも筆とりて、よしなしごとども書きつくるが、たま〳〵も散りぼひ残りて、後の世に傳はらば、今の古を見るがごとく、後の人はたわれを友とせんには、千とせの末にさへ知る人あるこ

鈴屋の翁　本居宣長。

比良のおほわだ　琵琶湖。

さゞれ浪もて名をおほせたる屋　淸水濱臣の泊洦舍。

こちして、いとをかしくなんおぼゆる。よろづの心やれるわざいとさはなれど、たゞひとりゐてあかずたのしきは、書のほかにまた何かはあらん。「あるが上にもあらまほしきは書なりけり。」と鈴屋の翁のいはれたるは、げにさることにこそ。

うけらが花

加藤千蔭

一 泊洦舍の蓮

大比叡うつされたる上野の岡の麓、比良のおほわだなせる池水のほとりに、さゝなみや志賀のさゞれ浪もて名をおほせたる屋あり。富士のみ雪も消え、土さへ裂くといふなる頃、人みなすゞみせんとてそのやどりにつどひて、高き屋にのぼりて見わたせ

ゆはた　しぼり染。

衣笠　絹などを張つた長柄の傘で、古、貴人にさしかざしたもの。

西の湖　支那浙江省杭州府にある西湖。

ば、池の面は紅のゆはたと見ゆるぞ、蓮の花の咲きみちたるにてはありける。生ひたてる葉の廣ごりたるは、宮路行くうま人の衣笠のごとく、浮きたるは、大庭に百の司のわらふだ敷きならべたるごとく、葉における露は、白玉の五百つつどひを解きみだしたるになん似たりける。池の水清らに澄みて、あそぶいろくづ思ふことなげなり。人々衣の紐を解きさけ、おばしまに寄りゐるほど、かの岡の木高かる瑞枝吹きこす風の涼しきに、えならぬ香のかをりくるもたとしへなしや。

かなたの岸より中島まで長き堤を築きて、石もて造れる橋かけわたせるは、もろこしの西の湖とかやいふめる所のさまかけるかたに似通ひて、遙かに行きかふ人の袖のにほひさへなつかしく見ゆ。人々心々に歌によび出づれば、もだもあらず。

なべて世のにごりにそまで住む人の友と見るべき

秋こそことに　「山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつゝ」（壬生忠岑。古今集）

花ぞこの花

かくて上野の岡の入相の鐘、木の間しのぎて響きわたれば、みさかりにひらけたりし花の、またふゝめるさまに立ちかへりたるもあはれ深かるものから、をちかたの梢の鷺すらねぐらもとむるものをとて、人々あかれかへりぬ。

二　山里

耳に鳴弭の音を聞かず、目に旗手の靡きをしも見ぬ御時世に逢ひては、何事につけてもうしとわびしと怨みかこつべきことやはある。されば、世を避くとしもあらねど、あきじこる市の巷に近きにぎはしさをいとひて、この山里にはうつろひ住めるになんありける。「秋こそことに」といへるもうべなるかな。まがきの下にたゝずめるを鹿、松に木傳ふましらの聲も、ひとりある人を

石濱の庵　千蔭の別宅で、今の淺草區橋場町にあつた。

慰むるに似てあはれなるに、茜さす日も入りはて、杣人の斧の響絶えて、端山のかひより月さしのぼれば、そがひの嶺より落つる瀧つ瀬は、黄金の色の絲引きはへたらんごとく、岩に碎くる水は、白玉をこき散らすかとぞ疑はる。とこしへに淸らにして、ものに滯ることなきをわが心とはせんと思ふに、たゞへてんものはなぞ。たゞ月と瀧つ瀬とのみ。

三　隅田川の雨

葉月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほとり石濱の庵に行きて宿りぬ。有明の月のにほひも、霧たちわたる曉のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼ降る日なんことにあはれは深かりける。もとより萱葺ける庵なれば音だになくて、軒のしづくの三つ四つ落ちそむるより、まがきの

秩父の山　武藏國秩父郡にある連山。

萩の下葉の色づきたるが、ほろ〳〵と散るもあはれなり。水の面は動くともなくて鏡のごとくなるに、雲の濃き薄きうつろひて、かつ浮かびかつ消ゆるみなわにこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをの一すぢは、さしひく汐にもまじらで、とはに縹の色に流れいにて沖に出づめり。これや水上の秩父の山の眞淸水の落ちくるならん。うちむかふ岸の榛原のみ濃き墨がきのごとくなるが中に、柞の黄ばみたるはさすがにほのかに見えて、そのひまひまより長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やう〳〵に薄墨もて書きけちたらんごとく、いとしも遙けきは、たゞ靡かぬ煙とのみぞ見ゆる。こゝかしこより鳥の飛びゆきつゝ、ねぐらの鷺のつばさ重げに起きいでて、河の瀨の眞菰に下りたてば、みさごの群れきて水の面に浮かべるもをかし。上つ瀨より筏師の蓑笠きて、棹を筏の上に横たへ、おのれたむだきて、思ふことなげにを

筑波嶺　常陸國筑波郡にある。

みくまりの神　水配りの神の意で、水神をいふ。こゝは隅田河畔の水神の森にある毘沙門天を指す。

り、筏は水のまに〳〵流れ行くもしづけし。渡守舟さし出せば、大笠傾けてわたり行く人の、やがて堤を歩くさまも繪によく似たり。すべて一日のうちに、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひ來て、岸の木立も、長き堤も、あるはあらはれ、あるは隱れて、かぎりなき青海原にむかひたらんやうにおぼゆるをりもありけり。かくてやゝ夕暮近くなりゆけば、むら鳥のおのがじしねぐらもとむるに、雁の一つら二つらわたり行くなど、えもいはんかたなし。暮れはててもなほ行く水の色のみ遠白く殘りて、河ぞひ小田にいはへるみくまりの神の御火の、海人のいさりともいふべく、かすかに見えわたるもあはれなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田川たが墨がきのすさび
なるらん

七つのをの琴　七絃琴。

笠にぬふてふ云々　「青柳を片絲によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠」(古今集、大歌所御歌)

待たるゝものは　「あら玉の年たちかへるあしたより待たるゝものは鶯の聲」(素性法師。拾遺集)

四　初雁

桐の葉の一葉散りそむるゆふべ、ひとり高き屋にのぼりて、七つのをの琴をかきならしつゝ、秋の風のことばをうそぶき出せるをりしも、遠つ人はつかりがねの聲かすかに聞ゆるにおどろきて、しばしひきさしつゝ見さくれば、姿は雲路になん消えうせぬる。いでや白雪のふる年よりしもはねならはしつゝ、かげろふの春立ちそむるあした、日影うら〳〵とうち霞めるに、軒近き篁にねぐらしめつる鶯のまだ片なりなるうひ聲にほひ出せるより、笠にぬふてふ花のかをりみてる枝に來ゐつゝ、ほこりかにさへづるはめでたきものから、雲にたぐへし櫻も散りすぎて、青葉しげき木の間を立ちぐく聲のむくつけきには、「待たるゝものは」といひしに引きたがへてぞおぼゆるかし。

そも〳〵雁は常世の國をや出でけん、み越路よりや來ぬらん。或時は眞木たてる荒山のあしたの霧にむせび、或時はみるめ刈る八潮路のゆふべの浪をつばさにかけて、草の枕だに結びあへず、天路遙かに思ひあがりて、夕暮の雲の旗手に、聲はを舟こぐ唐櫓に通ひ、姿は薄墨にかける文字に似て、一つら過ぎゆきつゝ、をちかたの田づらに落ちくるさまさへおほどかにして、その時しも荻の葉におとなふ風、萩が枝に亂るゝ露、くまなき夜半の月、染めかくる木々のもみぢ、千たび八千たびうちすさぶ砧の音、おしこめてあはれなるをりに逢ひぬるが、かぎりなくめでたくなん。また別けていぬる春べには、「花を見すつる」などとがむめれど、しづけかるみ山の花をつばさにしめんとて、都の空をいそぐならんと思へば、そもはた憎からずこそ。雁よ〳〵、なれこそわが思ふどちなりけれ。

花を見すつる「春霞たつを見すてゝゆく雁は花なき里にすみやならへる」（伊勢。古今集）

われもいざ秋をあはれぶ友どちのつらにはもれじ
天つかりがね

五　黄葉

古より人のわきかねたる春と秋とのけぢめは、末の世に明らめはつまじければ、たゞ春は春をめで、秋は秋をこそあはれむべけれ。荻の上風身にしみそめてより、萩が花に眞袖をにほはし、遠つ人はつかりがねに玉章のたよりをかこち、なかばの秋の月の光には、千さとの外を思ひしに、はや峰の柞、野邊の淺茅のうつろひゆくより、草木ことごとたゞならぬぞ、秋はあはれのとぢめなりける。

こゝに大城のとのへの北に、近つあふみの比叡をまねばれたるみ山あり。その麓はかしこになずらへて坂本となんいひける。

なかばの秋の　云々「三五夜中新月色。二千里外故人心」（白居易）

坂本　今、下谷區坂本町。

いざこゝに云　「いざこゝにわが世はへなん菅原や伏見の里のあれまくもをし」（詠人不知。古今集）

布留の山里　「初時雨ふるの山里いかならし住む人さへや袖のぬるらん」（詠人不知。新千載集）

もろこしの清き入江にさらせる錦　蜀江の錦。

斧の柄もくたしつべく　晋の王質の故事で、暫くと思ふ間に、永い年月を經過すること。

そこより奥まりたるあたりは、ことにいと清らに、しづけさいはんかたなし。いざこゝにわが世は經なんとて、はやくすみかもとめつる人ありけり。この頃の時雨だつ雲のけはひに、布留の山里いかならんと、心知れる人々かきつらねつゝ訪ふに、木高き松に枝かはせる楓の、色こがるゝばかりに染めなせるは、まことにもろこしの清き入江にさらせる錦も及ぶまじくて、さらでだにうしてふことは聞きも見もせぬわたりには、斧の柄もくたしつべくおぼゆるを、ましてかく染めつくせる木のもとをば、いかゞは立ちうからざらん。臥待の月、やゝ梢をのぼり、淺茅が露、玉を敷きたらんごとく見えわたるに、名に負へる長月の夜を長しともおぼえず、語らひあかしつ。

六　山水のすがたをゐがかせて

日蔭　日蔭かづら。

文机によりゐつゝ、ほどなきつぼのうちの草木をのみあはれみて、思ひ足らはせるにしもあらず、名ぐはしき吉野の山の奥をとめ、久方の天の橋立をたづね、常磐なる松が浦島に渡りてぞ心ゆくかぎりなるべきを、遠く出でたたんもいたつがはしく、ものうければ、足行かずして、千さとの外まで心を放ちやりてんわざもがなと思ひめぐらして、山と水とのすがたを壁にゐがかせて、心をしづめてうちむかふに、岩がねのこゞしき嶺よりみなぎり落つる瀧つ瀬あり。かたへのを岫より横ぎりわたる白雲に、半ばたえて麓に落ちくるは、その響聞ゆべく、そが末つ方は、水の面に造り出せる檜皮屋のもとまで流れたり。すだれ高くまきて、みたりよたり思ふことなげに語らふさまを見れば、われもその人々にまじらひをるこゝちす。木高き松に日蔭生ひたれて、梢にはましら群れゐつゝ、木の實とりはむなどもをかしきや。つゞらをり

なる山路を、手束杖ひきてのぼり行く人あり。わらは琴を抱きてしたがへり。いづこへ行くならんと見れば、山のなからばかりのたひらかなるに、黒木もてあづま屋造りて、ひとり笛吹きすさべる人のもとをさして訪ふなめり。遙かに木立うちけぶれるひまひまにちひさき家居見えて、細き棚橋渡したるを駒に乗りて行くあれば、水際の蘆間に舟をうかべて、さでさしおろし、あるは釣垂るゝなども見ゆ。朝な夕なこれを見れど、あかぬあまりに、かの瀧のもとなる人の心をよみける、

　心さへすみわたりけりとこしへにみなぎる瀧の音
　になれつゝ

笛吹きゐたる奥山人の心を、

　わが山の松の嵐よ世の中の笛の音をだにさそはず
　もがな

林にやどる云云　「鷦鷯巣ニ深林ニ不ㇾ過ギ一枝ニ。偃鼠飲ミㇾ河ニ不ㇾ過ギ滿腹ニ。」（莊子）

琴後集

村田春海

一　知足庵の記

あはれ、世のならはしこそはかなきものはあなれ。たかきいやしき品いとことなりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるはまれにて、たゞ足らはぬことのみぞ多かりける。花を思ふとては、梢の嵐をうらみ、月をめづるとては、尾上の雲をいとふためし、誰かはのがるべき。林にやどる鷦鷯は、わづかなる小枝のかげをのみたのみ、流に水もとむる鼠は、たゞ腹ふくるゝに過ぎず。」とこそ古人もいひつれ。かゝることわりをだにわかたば、かぎりある世に、かぎりなきことを思ふべきかは。

栂尾の昔　建久二年、僧榮西が宋から持つて來た茶の實を、山城の栂尾の明惠上人が宇治・栂尾に培養し、茶の湯をはじめたのをいふ。

こゝに中村のぬしなん、よく塵の世のけがしきを遁れて、萱の軒、松の樞に心の月をすましめ、花を摘むゆふべ、閼伽をくむあかつき、み佛につかふるいとまある時は、氷を碎き、雪を煮て、栂尾の昔をしのぶめるわざにしも心をなん慰めける。これやこの世にもとむべきすぢをも忘れ、また人を羨むべきふしをも思はで、おのが心から事足るわざにしもあれば、かの古人のいひけんことわりにこそかなはめ。うべな／＼、このすみかをしも足ることを知るとは名づけしこと。

二　隨時樓の記

うつせみの世の人のことわざ、よろづにさま／＼なれど、時にそむき、をりにあはで、つき／＼しからざらんは、いみじきふしなりとも、いかで心のゆくわざなるべき。されば、夏の日は埋火のあ

春のあじろ云云　「すさまじきもの、晝吠ゆる犬、春のあじろ、八月のしらがされ云云」（枕草子）

たゝかなるを思はず、冬の夜に氷水の涼しさをば忘れつべし。古の人も、春のあじろ、葉月のしらがさねをこそ、すさまじきことのためしには引きいでたりけれ。かゝれば、はかなきすさみも、をりにあひたるはをかしく、見どころなき木草も、時を得たるはめづらかになんおぼゆる。しかはあれど、人ぐさしげき巷の、所せく門たちならべたらんあたりには、時をすぐし、をりを失ふたぐひ多くて、月にたよりよきは花にうとく、水によしあるは山遙かにて、四つの時のゆきめぐるにしたがひて、心をやるべきすまひは、いともいともかたしや。

こゝに前田のぬしの高殿こそ、あやしく所えてはおぼゆれ。しりへは市路につゞくものから、前は世ばなれたる望あり。春はむかつをの花のかをりを、ゐながら袂にしめ、夏はみなぎは清き池の蓮葉を、舟ならずして手折り、秋は月にうそぶき、冬は雪にうた

ふも、すべて山水のあはれをそへざるをりなんあらざりける。かくとこしへにあく世も知らぬ高殿なれば、ことさらに時にしたがふてふことをもて名づけられたるは、深き心しらひにこそありけらし。

三　燒畫の記

よろづ何のわざにも古より法となすしるべありて、それによらざらんは、まことのこゝろを得がたく、その法を得たるは、まめやかなりとて、人もうべなふめり。こは、もとよりことわりさることながら、深く事のもとを考ふるに、よろづのこと、はじめに法をまうけおきて、後にそのわざをなし出づるにはあらず。そのわざあるがうへにこそ、法てふことは出でくめれ。かゝればわざは本にて、法は末なり。かれ何のわざにもよく心を深めて、その道に入

かう守。

りたらん人は、われより法をばはじめつべし。すべてくだりたる世人の心ぐせにて、法になづみ、あとにかゝづらひて、かへりてあらぬかたにひがみもてゆくたぐひも多かるをや。

こゝに燒畫といふわざあり。はやき世のすさみにて、中昔の書にもそのこと見えたれど、今は世に絶えてそのあとも殘らず、ましてそのわざ得たる人とては誰かはあらん。しかるを若狹のかうの君、稻垣の朝臣(あそみ)は、繪を深く好み給ふあまりに、このわざをふたたび世にしいで給へり。そのものの形をうつし給ふを見るに、まがねを燒きて筆とし、火をもて墨にかへて、筆づよにとりなし給ふところは、紙のおもていたくこがれ、輕らかにかいやり給ふかたは、火の氣かすかににほひて、またく墨がきの心しらひにことならず。さるは、水のながれ、山のたゝずまひ、木・草・鳥・獸・人のよそほひ、家居のありさま、何くれのくさはひ、筆の心のいたらぬくま

なくなんおはすなる。これぞこの古人の跡をもふまず、われとわが心をもて、法を定めてものし給ふなるは、いと〳〵めづらかにこそ。今よりして、このわざをすぎ〳〵にまねび出でん人、誰かはこの君をもて、この道の親とめでたふとみ奉らざらん。

四　秋興

秋のけはひのうつろひゆくまゝに、野面のすまひぞいはんかたなくをかしき。そともの小田の穂なみは、かつ〳〵色づきそめて、まがきのもとのを萩は、をり得がほにほころびわたれる、露のにほひ、風のおとなひ、いづれあはれをそへざるなんなかりける。さるは、夕月のおもしろきを、たゞにやはすぐさんとて、蓬生の露うち拂ふなるは、わがたまあへる人々なりけり。伊豫簾高うまけば、村雨のなごりの雲は絶えまがちなるに、そこはかとなき外山

山を望めば云々　「望レ山幽月猶藏レ影。聽レ砌飛泉轉倍レ聲。」（菅原文時。和漢朗詠集）
萩のうは露云々　「鳴きわたる雁の涙も落ちつらんもの思ふ宿の萩のうは露」（詠人不知。古今集）
霞みていにし云々　「春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴くなる秋霧の上に」（詠人不知。古今集）

のたゝずまひも、月影にもてはやされて、やう〳〵あらはれゆきぬ。「山を望めばかすかなる月。」と口ずさみ出づれば、をりしも峰飛びこゆる一つらの聲定かなるは、この麓田に落つるなるべし。「げに萩のうは露もたゞならず。」などいひしろふほどに、一人がいひけらく、「霞みていにし雲路のなごりなくおぼえしを、秋霧の上に聲聞きそむるが、よにめづらかなることはさらにもいはじ。すべて四つの時、花鳥の色香にそへて、はかなきことのはをのばへ、すずろなる心を動かしつべきくさはひ多かる中に、世をうらみては、人の心の秋をかなしみ、うきを歎きては、中空にものを思ひ、雲水に身をたぐへては、この世をかりとたどるも、をりにふれ、事につけつゝ、あはれさ似るものなくこそおぼゆれ。」

五　伴蒿蹊におくる

遠のみかど　江戸。

秋の日數も殘りすくなうなりはべりにたるを、都の御すまひよ、いかに明し暮し給ふぞ。この遠のみかどは、大方に山いと遙かにて、露霜の心おそきならひにはべれば、立田姫のすさみもはかばかしうもはべらずなん。さるは、都の空のみゆかしう思ひやられはべるが中に、まして塵に染み給はぬあたりは、なにの山里、くれの古寺、御心ゆくかたぞ多かりなん。

都人いづれの山のにしきをかことばの色にたぐへ
ては見る

この頃は御手染のめづらかならんこそ多からめ。風のたよりを忘れ給はで示し給はば、下照る影に伴なはれはべらんこゝちせんは、うれしきわざなるべし。あなかしこ、立つ霧にな隔て給ひそや。

市のうちに隠れけん古人　「小隠隠二陵藪一、大隠隠二朝市一。」(王康琚)

六　上田秋成がもとへ

春立ちかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしうはべれ。今は巖の中なるすまひをふり捨て給ひて、巷の花柳に立ちまじらひ給ふらんは、いかに心ゆく御すみかならまし。

巣ごもれる谷のうぐひすいかなれば都の春に心ひ
かれし

となん聞えまほしき。されど、うき世の塵の遁れがたかなるも、なほ市のうちに隠れけん古人のためしにならひ給ふべければ、世のさが知らぬ人々とのみ、みやびかはし給ふらんは、山ずみのつれづれならんよりはと、推しはかりまゐらするものから、いたづらに千さとのよそにありて、よろづまのあたり聞えうけたまはらぬこそあかぬわざなれ。さはいへ、雁の翅の行きかひだに絶え

遠くて近き云云 「遠くて近きもの、極樂、船の道云々」（枕草子）

ずば、なか〳〵に遠くて近きたぐひとや思ひ慰みはべらん。柳の絲のくりかへしつゝ、今年もとだえなく聞えまゐらせばやと思ふを、ゆめ鶯の鳴く音な惜しみ給ひそ。

七　月に對して志をいふ

伊豫簾高うかゝげて、更けゆく影をひとりうちまもりて、つらつら思ひみれば、おのづから心の塵もなごりなくて、なべてよろづのことぐさこそ、くまなく思ひいでらるれ。さるは、千ぐさの花に露のにほひをそへ、絲竹の音の響を澄ますらんたぐひの、世のつねのをかしさをば、さらにもいはじ。いでや、澄みのぼる光の高くあらはれて、人の目とゞめんに、まばゆきばかりなるも、時のまにあやなき霧のまよひにかきけたれて、たゞ闇かとばかりたどり、中空にしばしありと見ゆるも、やがて西になることのとゞめ

みしぶ　水澁。水のあか。

わが世のかたぶくを歎き　「秋のはじめになりぬれば、今年も半ば、過ぎにけり、わが夜ふけゆく月影の、傾く見るこそあはれなれ」。（慈鎮和尚）

老となるもの　「大方は月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの」（在原業平。古今集）

がたきに、うき雲の定めなくて、昨日はさかえ、今日はおとろふる世のありさまこそ、まづおぼゆれ。また淺茅が露に宿れども、所せくもおぼえず、海原の波にうかびても、廣きを知られざるは、高きみじかきおのがじしのすみかのきは〳〵につけて、身の安かる心しらひによそへつべきもあはれなり。また落ちたぎつ瀬々の白玉は、これがために心清さをませど、野澤の水のにごりに宿りてもさらにみしぶのけがしさをきらはざるは、世にしたがひ、時にさかふことなくて、光をつゝみ、跡を隱すとかいふらん、さかし人の心の奥さへくみ知られぬべし。またあるをありとも見ず、なきをなしとも定めあへぬひじり心のさとりも、たゞこの光を磨きてこそ照らすべけれ。かゝれば、いたづらにわが世のかたぶくを歎き、老となるものとのみうちながめんは、いとも〳〵心あさしや。

縣居の庭　賀茂眞淵の門。

大かたに見てやは過ぎん空の月ちゞに心をおもひよせなば

八　芳宜園の大人の墓を祭る

こゝに文化の五とせ九月八日、謹みて芳宜園の大人のおくつきの御前に、菊のはつ花一枝をたむけ、香の木一片を燒きて、うなねつきて申さく。あはれかなしきかも。君はわれに十といひて一とせのこのかみにおはすなるが、つねに縣居の庭にものまなびに行きかひて、あひうるはしみまつれること、親子はらからにもことならず、書讀むとては、君を師ともたふとみ、歌作るとては、われを弟のつらにぞ訓へ給ひける。君仕へをしぞき給ひて後は、われも同じ巷に移り住めば、花をたづぬとては、われ道しるべをなし、月をおもふとては、君が舟にあひ乗り、うきことも倶にうれへ、

くひぜを守り　「宋人有耕田者。田中有株、兎走觸株、折頭而死。因釋其耒、而守株。」（韓非子）

舟にきだつくる　「楚人有渉江者。其劍自舟中墜於水。遂刻其舟曰、是吾劍之所從墜。舟止、從其所刻者、入水求之。」（呂氏春秋）

うれしきふしも倶によろこびて、世にありふるわざのまめごとも、あだごとも、かたみにへだてなく心をかはせること、今にはたとせ、そのはじめをくりかへし數ふれば、あひ友たることすでに五十とせにぞあまりける。さるを今おくれ奉りて、いつの世にかあひ見ん、いづれの時にかことゝはん。つねなきは人の身のならひぞと知るも、これをいかでか歎かざらん、かゝるを誰かはよくたへん。あはれかなしきかも。文の林世々に衰へ、ことのはの道日日にくだりゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てて、古にかへり、青雲の高き心しらひをもとめ、しづはたのあやあるみやびごとをたふとみいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくるともがら、かれになづみ、こゝにひかれて、なほあやしみ咎むるたぐひは多く、たまあひてよくうけひく人なんまれなりしを、君ひとり心をおこして、あまねくさとし、廣くいざなひしより、近き人はまのあ

藤原　持統・文武兩天皇の朝。
寧樂　奈良に同じ。元明天皇から光仁天皇まで七代の朝。
堀河・鳥羽の御時　堀河天皇の朝に「堀河太郎百首」、鳥羽天皇の朝に「堀河次郎百首」があり、歌が盛であつた。

たりあひうづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、古ぶりの歌、世にさかりになりにたるは、まことに君の力によりてなり。そのみづからよみ出で給へる歌を見るに、古きしらべ、新しきすがた、とりどりに具らざるはなし。その古をうつせるは、藤原・寧樂の御世におよび、後のたくみにならへるは、堀河鳥羽の御時にくだらず。心におもふことは、口につくさざることなく、目にふるゝものは、ことばにのせざることとなんあらざりける。これを見て、高きもみじかきもめでたふとまざる人なし。また、ことどのみの人は、その名を君に知られては、身のおもておこしと思ひて、世にもほこり、君のひとうたを得ては、「あたひなき寶にもかへじ。」といひてぞ深くよろこびける。さるを今こがねの聲たちまちやみて、玉のひゞきふたたび聞えずなりぬるは、わがどちのなげきのみかは、大方の世人のうれへともいひつべし。これをいかでか惜しまざらん、かゝ

るを誰かは慕はざらん。あはれかなしきかも。わがかくことあげするを、泉の下にもさやかに聞しめし、天がけりても遙かにみそなはせとなん申す。

泊洦舍集　清水濱臣

一　花に寄する祝言

そもそも天地の中にはらまれ、世の中にあれとあれ出づる人の身に、何事をか幸とし、何わざをかたのしみとは思ひ、いかなるふしにかよろこばしく、いかなるをりにかうれしとはいはん。あるは官・位に望をかけ、あるはこがね、しろがねを家に倉に積みかさねんことを願ひ、あるは桂の枝を折りて雲の上までも名を輝か

いたづら人　濱臣みづからいふ。

飛鳥山　東京市の北郊北豐島郡瀧野川町にある。櫻の名所。

さんことをほりし、あるは綾・錦を身にまとひ、絲竹の音に心をとらかすをたけきこととするなど、心々のひくかたによりて、とりどりに捨てがたきならひなるを、このいたづら人、さらにかゝるすぢを心ともせず、もはら野山のあそびに身をゆだねて、たのしきことのかぎりと思へるは、いみじき世のすねものなりけり。

この春も二月のはじめより、むかつをの梢に目をつけ、にほひそむるを待ちとりて、あしたに行き、ゆふべにいたり、花の蔭に立ちもとほりつゝ、なほあかぬあまり、飛ぶ鳥のあすかの山をわけ行く水のすみ田川にさかのぼりて、花より花に狂ひめぐりけり。さるに、みづから思ひけるやう、あはれ、さちある身や。あはれ、たのしの身や。われらいかばかり野山の花にあくがれんとすとも、櫻花絶えてにほはぬから國の境に生まれ出でたらましかば、何にかく思ふがまゝに花見ることを得ん。今うれしくも日の本のや

まとの國に生まれたる、これ一つのさきはひなり。われらいかばかり野山の花にあくがれんとすとも、四方の海靜かならず、浪風しくめる世に生まれ出でたらましかば、何にかく思ふがまゝに花見ることを得ん。今うれしくも治れる大御代に生まれあひたる、これ二つのさきはひなり。われらいかばかり野山の花にあくがれんとすとも、深き八重山の奥、遠き島隠れに生まれ出でたらましかば、何にかく思ふがまゝに花見ることを得ん。今うれしくも咲く花のにほふがごとき江戸の大城のもとに生まれあひたり。これ三つのさきはひなり。われらいかばかり野山の花にあくがれんとすとも、位高く、仕への道にいとなく、よろづ所せき身ならましかば、何にかく思ふがまゝに花見ありくことを得ん。今うれしくも天の下にほださるゝことなく、身を心にまかせたり。これ四つのさきはひなり。われらいかばかり野山の花にあくがれ

手の奴云々 「今一身を分ちて二の用をなす。手の奴、足の乗物、よくわが心にかなへり。」（方丈記）

んとすとも、病つねに身をおかし、手の奴、足の乗物、心にまかせずば、何にかく思ふがまゝに花見ありくことを得ん。今うれしくも身すくやかに、いたづくかたなし。これ五つのさきはひなり。あはれ、まことにたのしく、よろこばしく、うれしく、さきはひあるわが身ならずや。

二　月の夜友のもとへ

いざ給へ、もろともに、この月のさやけきを、所せきつぼのうちのみやは見はてはべらん。なにがしがなりどころにまからん。それも、まらうどなど來あひて、あるじまうけするほどならば、それがしのかくれ家にまからん。それも、ありきたがひてあらぬほどならば、北山の律師の室をおどろかしはべらん。それも、もし野におりたらんほどならば、うしろの山にのぼりて夜もすがらめで

そめいろの峰　蘇迷盧、即ち須彌山のこと。

明さんを、いざ給へ、もろともに、

なべて世の塵をよそなる高山の松の梢の月をいざ
見ん
そめいろの峰までもこそ。

三　秋の七草

木の花は春ににほひをつくし、草の花は秋を時とすれば、誰もみな春は山邊をとめ、秋は野路にあくがるゝをこそあそびの道の常とはすれ。そも〳〵秋の野に咲きみだるゝ千草は、とを・はた・みそ・よそとその數多かめれど、これはしもと取出でてめでもてあそぶべきは、かの七種になん盡きぬべき。そが中にもまたすぐれたるはいづれとか定めん。をみなへしは、花のさかりなるほどこそあれ、はて〳〵はうたてあやしき香のそひて、花瓶に入りた

秋とはいはん　「人はみな萩を秋といふよしわれは尾花がうれを秋とはいはん」（萬葉集）

るなごりなどもあさましきまでに、花さへうちおほはるゝや。撫子は、からにやまとに色をまじへて、うるはしくあてなれど、とこなつにうつろはずして、秋にまで咲きかゝれるがあきたるかたもあるべし。朝顔は、いとらうたし。朝ごとに色あらたむるなど、ここち清げなれど、これはまた見るほどもなくしをれわたりて、露のひるまだに待たぬが事たらぬこゝちぞする。葛は、風のまにまに吹きかへす葉末の裏めづらしきこそあれど、はひひろごるもうるさく、ふぢばかまは、にほひのいひ知らぬはさるものから、見立てなき花のさまならずや。尾花ぞ古き歌にも「秋とはいはん」とよみたれば、あるが中にもまさりたるやうなれど、廣き野末にめぢのかぎり高やかにさし靡きたるは、白妙の袖ともあやまたれて、心とまるこゝちすれど、二もと三もとが、所せきつぼのうちなどに生ひたてらんは、何のをかしきふしかあらん。いでや萩の花

名だたる大野ら　宮城野など萩の名所をいふ。

やごとなき御垣　清涼殿の萩の戸をいふ。

を見よ。秋のはつ風やうやう身にしみわたるほどより、かつがつ咲きそめて、あるは名だたる大野ら、あるはほどなき前栽、多くも少くも、やごとなき御垣のもとにかぎらず、葎はふ賤がはひりをもきらはず、所えてにほふさまなつかしく、はためでたきにあらずや。さらば、七種のうちにもまさるべく、千ぐさの中にもすぐれたるは、この花をさしおきて、またいづれとかいはん。

四　擣衣

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。かりがねの聲の擣衣をさそふにやあらん、擣衣の音のかりがねにかよふにやあらん。あなあやし、あなあやし。そもこの音のかなしきか、住む里のさびしきか、擣つをりのうきゆゑか。みなあらず、聞く人の心のわびしきなり。

ふるさとの鱸のなます思ひ出でけん人　晉の人張翰が故郷の鱸を思ひ出して官を退いて歸つたといふ故事。
王公の位を釣りえし翁　呂尙(太公望)が釣をしてゐるうち周の文王に擧用せられた故事。

五　漁夫の辭

秋吹く風に耳そばだてて、ふるさとの鱸のなます思ひ出でけん人こそ、げにさることとはおぼゆれ。岸のひたひに老の浪をたたみて、すぐなる針に王公の位を釣りえし翁は羨ましくもあらずや。われはたゞ世を捨舟に棹さして、山陰の靜けく、水草の清からんあたりに息の緒のかぎり心をやりて、うへなきたのしみとはなしぬべきぞかし。

六　縣居の翁の墓參會に

いにし世をしのび、過ぎゆける昔を思ひいづれば、すべて何かは夢ならぬ。悔しく過ぎにし昔語は、取りかへさんにもよしなく、語りいでんもやくなきことながら、おのれいと若くて二十に三

錦織の屋　村田春海。
この御寺　品川東海寺。

つ四つたらぬほどより、錦織の屋のあやなる手ぶりに思をかけ、芳宜園の色なることのはを心に染めて、あしたゆふべに馴れむつびきこえて、古事まなびのこと問ひものしたるに、その二人の大人たちも今は世におはせずして、その語り聞かされしをりのことらもまた五とせ十とせの昔語となりにけり。おのれ才拙く、心たましひたゝはしからで、まなびのつねに愚かなれども、幸に二人の大人たちに馴れしたしみて、翁の昔語を耳に留め、二人の大人たちの世にいまそかりしあしたゆふべを目に忘れずしあれば、翁のとありしふし、二人の大人たちのかゝりしすさみを、事に觸れては思ひいでて、かつ慕ひ、かつなつかしむ。

あはれ、今この御寺に翁のおくつき詣するも、年ごとの恆例のやうになりて、十とせあまり四とせにもなりぬ。今年も例の人々と共にこのおくつき詣すとて、豫めことがきをまうけて、「いにし

ことらは夢のごとくなり。」といふことを歌やことばやと人もよみ、われも作らんとするに、はかなきそゞろごとしもいひつゞけられたるなりけり。

藤簍冊子　　上田秋成

一　十雨言（一）

五日に一たび風吹き、十日に一たび雨降るといふ、聖の御代のためしにぞいふめるを、一とせすぐるほどのついでをしも見れば、睦月たちて、人の心を春にあらたむるにはあらで、鶯のはつ音のおとづれ、梅の南の枝にほころびそむるとこそ見れ。山々に霞かゝれるも、夕つけて風さえ、立ちまふ雲はなほ冬のなごりして、

五日に一たび云々「太平之世五風十雨。」（王充論衡）

沫雪の梢どもにはつ〳〵かゝれど、土に落ちては、つみがてになん見ゆるも、都べは照る日ながらに日ごとうち散るを、山里いかならん、思ふもすゞろ寒けしや。

そのほど過ぎては、木の芽はるさめ、今日いく日降りつぎて、野はふる草に新草まじりて萌えいづれば、四つの澤水もやゝ滿ちぬべし。み吉野の花にとて旅だつ人の、あまぎぬうちかづきて、散りや過ぎなんと、心あわたゞしくわけのぼるぞわりなき。

夏の林の綠に染めますに、ゆふべを告ぐる鐘の音さへ、うちしめるばかりにふるは、袂涼しきはじめなりけり。短夜の月のあゆみいと疾きやうなるに、小雨うちこぼしつゝゆく雲のかゝれるかと見るに、ほとゝぎすの一聲鳴きすてて、またをちかたに二聲三聲かすかに聞ゆるもうれし。田子の裳裾のひぢりこにそみつつ早苗とりはやす、五月雨のはれまのいそぎを、里つゞきに、何と

今日いく日云云「春日野のとぶ火の野守出でて見よ今いく日ありて若菜摘みてん」（詠人不知。古今集）

四つの澤水　四方の澤水。「春水滿四澤、夏雲多奇峰、秋月揚明輝、冬嶺秀孤松。」（陶潛）

野洲川　近江國野洲郡にある。
鈴鹿川　伊勢國鈴鹿郡にある。

やらうたひつる丶、いとにぎははしな。野洲川・鈴鹿川などの岸のをちこちに、明日やはる丶と、心の外の旅寝する人、いかにわびしからん。

風は野分こそかなしけれ。ながめと降りかへては、いとさうざうしき秋になん。八月十日餘りの空の雲のまよひ、人の心をなやましうするよ。

望の夜の更けゆくまでも、軒のしづくのつれなく音するは、誰も誰も思ひきゆらんかし。曉がたのおぼつかなき空に、雲間もりてきら／＼しき影をば、大方の人は見ずてやあらん。立待ち、居待ちして見る月は、少しかけそこなはれこそすれ、待ちこひし夜にいかで劣りなん。夜はいつにまれ、村雨過ぎしなごりの雲に、はかなくさし出でたらん影に、垣根の草の露、玉と散り、時雨とそ丶げるこそ、いとも／＼あはれとはながめらるれ。うちかはす雁の翅

のひまもりて、梢にしづくするばかりなるは、これや長月のしぐれの雨なるべし。山の色のはつかに染むると見るに、こ丶かしこ山めぐりして降る雨はすゞろ寒げなり。

神無月の雲のけしき、都も田舎もおなじさまにはる丶日なきは、これや時じく雨のよしなるを、その頃すぎにては、みぞれと降り、雪あられとこりて、枕をおどろかし、窓のもとに夜更くるまで書よむ人の心すさびをもよほすなん、いとあはれとおぼゆる。

二十　雨言（二）

冬は歳の餘り、夜は日の餘り、雨は陰の餘りなり。書讀む人は、この三つのあまりもてなるといふ。かたりごとにはいへど、たゞいたづらに埋火に炭たきつぎ、春の木の芽を煮つ丶、飽かずす丶ろひをるおのれは、何をして齡たもつらんとは思ふものから、まな

こ暗く、齒落ちつきて、何をか讀み、何をか語らん。
雨をなつかしきものにするは、家富み、人多くもたりて、にぎははしきあたりにも、友垣の訪ひくる道を絶え、家のわざなどもさへられて、宿にのみこもりをり、書を讀みては、古をしのび、鳥の跡はかなう書きすさび、あるはいつきむすめに琴かきならさせ、よきものとりなめて、日ねもす夜すがらならん、いとたのしき。
あしたより起きいでて、夕暮過ぐるまでも立ちはしりても、たつる煙たえ〳〵に、人の情をだにうくるよしなきものらは、たゞうちうめき、つら杖つきて、つれなしやこの雨とながめたらん、いとはかなし。
高き御あたりのありさまは思ひかけねば、おぼし知られぬを、祭の日、馬も御車も、なべてあまぎぬうちかづけ引出でたる、今日の御使ざねをはじめ奉り、歌づかさ・御隨身・小舎人・わらは・仕丁な

どにいたるまで大笠めせきに隱れかねて、しとどに濡れつゝ、脛高くかゝげて、歩みなづめるを、これ見るとて出でたつ人も、今日はいと少く、さう〳〵しげなり。
東路なるわたり瀬の、高浪をあげ、岸を越えては、國の守のまゐりまかれるも、わりなくさへられては、もののふのたけき心も、たをやめにうみつかれ、千さとゆく駒も、鼠のごとくつながれゐたる、何も〳〵むとくにこそ見ゆれ。
人待たぬ家には、若きものどもまとゐして、古代の繪ども卷きかへしつゝ、あるは石はじき、へんつぎ、貝あはせなどして遊ぶ。老がまづしき庵には、ともし火かゝげあかし、書讀み、手ならひはかなう書きすさびて、曉知らず起きあかしたる昔のしのばしきは、今の身のうきことになん。

月は流を云々「石川やせみの小川の清ければ月も流を尋ねてぞすむ」（鴨長明。新古今集）

三　春のまうけ

あら玉の年を迭り迎ふるわざこそ、千とせの古今のうつゝ人も、變らぬよろこびはすなりけれ。春のまうけ、つかさ〴〵の衣・はかまの色あひ、ゆほびかに、新ならんがめでたし。民草もおのがほどほどにつけて、染めぬひする、めでたし。貧しきは解きあらひ調ずるいそぎのあはれながら、そもよろこびする心ばへなん、おろそかならずめでたき。米積みはへ、もちひ白づき、海のもの、山のものの、何くれと迭りかはす、あかずたのし。

四　月あかき夜

葉月あかき夜を誰かはめでざらん。ふん月望の今宵、庵を出でてわづかに杖をひけば、賀茂の河づらなり。雨降らぬほどなれば、月

月見れば云々「月見ればちぢにものこそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど」。（大江千里。古今集）

竹の中より云々「竹取物語」のかぐや姫。

は流をたづねてやすむらん。音をしるべにとめくれば、むべも清しとて、人々手にむすびなどして遊ぶ。風高く吹き、雲消え、影さやかにて、何をか思ふくまのあるべき。月見ればすゞろにもののかなしきぞとは、竹の中より生まれ出でし貌（かほ）よ人の、天にいまやのわかれ惜しむにこそ。

賀茂翁家集

賀茂眞淵

一　櫻

四つの時はゆけれど、春にしく時もなく、かゝなへて十まり二つの月は經てれど、彌生にくらぶる月もあらずなんありける。かくしも年にまれなる彌生の空にして、久方の光うらゝに、風など

き春の心よりなりでて、にほひさかゆる櫻の花なん、ちゞの花にすぐれにたるはうべならずや。この花はから國には生ひずして、やまとの國のはたてに咲けるこそ、まことなりけれ。おほよそ四方の國を四つの時にたとふるに、やまとは、日のさいつ國にして、春によれゝば、よろづのものみなみづ〳〵しく、人の心うらゝなり。から國は、日の經の中つ國にして、夏にあたれゝば、ちゞのわざこちたく、人の心はなはだしきなり。西の國は、日の入る國にして、秋になずらふれば、くさ〳〵のこと老いにて、人の心夜見におよべるなり。またかの國の冬によれらんをも、なずらへてなん知るべき。これらの中に、から人のめづてふ梅は、形のくるしく、桃は色のこちたきなり。やまとの櫻こそ、近くむかふに色淺らにして、名づくることばしもなく、あしびきの山々、わたつみのさき〳〵にみち咲ける時は、高き賤しきめでぬくまもあらざりけれ。これぞ、

天の益人　人民。

このなづけず、しひず、天地のなしのまに〳〵治め給ひなごしまして、天つ日繼のよろづにしらする皇大御世のすがたを知りぬべきものなりける。いでやもろこしの人の心もてつくれるまつろへごとには、梅のごとかぐはしきに似たる匂もあれど、こまやかにくるしげに、桃のごと深き色もありと見ゆれど、うたてこちたきに過ぎぬ。そが上に、こゝをたわめ、かしこをきりつゝ、しひてなほし敎へんとすなれば、民の心たへずて、つひに靜かなる世もあらず、人の國とすらなりはてにけり。ごを思ふに、春にしく時もなく、櫻にまさる花もなく、やまとにくらぶる國もなく、神の道におよぶ道もなきものを、天の益人、天つ心のまに〳〵、知らず、おぼえず、心をやりつゝ、さかゆる花のもとに、遊ばへをるかもうたひをるかも。

ふた國　武藏・下總。

これやこの葦・荻を分けつる國　武藏國のことで、「更科日記」に見える。

都鳥にこと問ひける川　隅田川のことで、「伊勢物語」に見える。

古のことのはの集　「古今集」。

二　隅田川の月

いつはあれど、照る月の秋のさかり、いづこはあれど、ゆく水のすみだ川に、夕波のふた國かけたる月見んとて、から・やまとの文人、絲竹にしもたへたるを列ねてうかぶることとあり。舟は潮のまにまに棹ならずしてのぼり、岸は舟のまに〳〵ゐながらにしてぞうつる。岸遙かに晴れて、百のうてなにすだれをまき、風靜かに吹きて、ちゞの舟の帷を動かせり。これやこの葦・荻を分けつる國にやあるらん、都鳥にこと問ひける川にぞあるらし。時のゆければ、かゝる都にしもなりにけることを、あるは目によろこび、心におどろき、今をほめ、歌しのびして、古なん語らひける。時に或人のいへらく、「わが朝に隅田川てふ川こそ多けれ。うちよする駿河なる、大鳥の出羽なる、この武藏なるは、古のことのはの集には、下總

後の道行ぶりの日記　「更科日記」。

のあはひと書かれ、後の道行ぶりの日記には、相模のさかひなりとぞしるしける。いでや月待つほどの慰めに、人々このこと定め給はんなり。」といへば、あるが中に一人あげつらふことは、「それ古の集は、後の人の筆を加へたるあり、後の日記は、野らに問ひてしるすことあれば、よるべきもの、なづむべからざるをや。そもそも葦・荻をや分けつらん、都鳥にやこと問ひけん。葦・荻は人草しげからんさがにして、鳥の名は都とならんしるしにぞありけらし。しかあれば、かゝる都のうちに流るゝ川をしも、絶えせぬ御代のためしにも引き、舊りにし名どころのよすがにもいふべきなりけり。」といひをはれば待ちとりて、ものの音をわなゝかし、澄みのぼる月にうそぶき出でたる、いづれの所かはしかん、いつの時にかは忘れまし。すなはち舟こぞりてかしこければ、今宵のありさま述べつくすべし。

わたつみの夕汐のぼる隅田川月の空まで舟もゆかなん

三　手習にものに書きつけたる

世の中を亂さまくする人も古より多かりつれど、えこそ亂しあへざりけれ。また治めんとせし人もさはなれど、いつか治めえたる。みな時によるのみなり。人のうへを深く教へんとする人多かれど、昔の聖とかいふ人の子にも、よき人のあらざりけりとかやいふなるは、こもまたむなごとなり。また人を教へんとて、人はよろづのものをさといひ、鳥・けものをばいやしめども、天の下に生ふるもの、草木も、鳥・けものも古のまゝにして直きを、人のみこそ、おのがさかしらを爭ひもてゆきて、かくわろくことになりぬれ。なか／＼にことわりめき、をしへめくに、心は賤しきものなればわたくしのかたにのみ構へなせり。天地の變らず、日月のまろなるにつけて生まるゝ故に、よろづおのづから生まるゝものはまろきによれり。人の教、人の立てたる道は、かどふしあり。たゞ天地にまかせてこそ、この國は治り來ぬめれば、何をかいはん。われはたゞ人こそわろけれ、鳥・けものに劣れりとのみぞおぼゆる。よろづのこと大方にて、聊かのならはしのありぬべきなり。いかなることとも、天地が中の蟲のわざぞかし。かくいひては、世にものなしと腹立つ人あるべし。そはまだしきが心ぐせよ。

四　世の人

生きとし生けるものの中に、人ばかりかしこきものはあれど、人みなかしこければ、かたみにかしこ爭をするほどに、世の中うつろひ變り、心しらひはよこしまにのみなんなりゆくめる。あし

道は云々「道也者不可須臾離也。可離非道也。」（中庸）

たのけにあきて、ゆふべのまけをなさず、今日の命を惜しみて、明日の死をも思ひまうけぬ鳥・けものの、なか〲に古・今とかはる世なきを見れば、かしこめきたる人ぞ、鳥・けものには劣れりける。この心を思ひたらぬ人、あるはかれになづみておのれと苦しみ、あるはこれを恨みて世を捨てなどするよ。生まれきたる世のまにまに、よろづのことを思ひのどめば、あへなんものを。

駿臺雜話　室鳩巣

一　年にはづかし

道は須臾も離るべからざれば、一生の間道を行ふ日にあらざるはなく、あふさきるさ道のある所にあらざるはなし。然るを急

あさがほの云云　鈴木某といふ筆者の知人の作といふ。

迫にして求めば、たとひ僅々の得ることありとも、皮膚の間にてやみなん。いかでかその肉を嚌んで滋味に飽くことあるべき。況や急迫なれば、久しきにたへぬものぞかし。いまだ日至の時に及ばずして、やがて倦怠するにいたりなん。翁思へらく、學問は勉勵を要とす。たゞ急にして迫切なるを恐る。義理は涵泳を貴ぶ。緩にして懈弛なるを戒む。迫切ならず、懈弛ならず、學者進修の道において緩急相得て背かざるに近かるべし。

二　朝顏の花

あさがほの花一ときも千とせ經る松にかはらぬこころともがな

朝顏をよめる歌多けれども、大方朝顏のあだなることをいひて、世のはかなきを知らするを趣向とする外は見えず。白居易が

彭殤　長壽と短命。
瞿曇　釋迦の別稱。
荘周　周代の學者。
朝に道を聞いて云々　「朝聞レ道、夕死可矣。」（論語）

「松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮。」といふ詩も、しひて榮枯を一つにし、彭殤を齊しうする意にて、俗耳には高きやうに聞ゆれども、いと淺きことになんありける。これらは瞿曇が涎を引き、荘周が唾をなむるに過ぐべからず。今「松にかはらぬ心」といへるは、それにてはなかるべし。朝に道を聞いて、夕に死するも可なり。」といへる意とこそ思ひはべれ。朝に咲きて日かげを待ちて消ゆるは、朝顔の天より受けたる性なり。世には千とせを經る松さへあるに、これほどはかなき生を得て、いさゝかおのれを忘れ、外を羨むの心なく、朝な〳〵いと快く見事に咲きて、受けえたる性分をつくして枯るゝこそ、花の見する誠なれ。いかであだには見るべき。それは松もおなじことなれど、朝顔のはかなきにて、一しほそのことわりしるく見えはべり。されば松の心に千とせなく、朝顔の心に一日なし。たゞおのが性分をつくすばかりなり。然るを松の千

とせをさかえと見るも、朝顔の一日をはかなしと見るも、たゞ見る人の欲目なり。松と朝顔の心に何かあらん。おもんみるに、朝顔も一日の壽といへど、おのが受けえしまゝに殘りなく十分に咲きて、さて日かげを待ちえて消ゆれば、何の恨かありなん。松の千とせと修短は大きにかはれども、いづれも天命をつくして、みづからあきたることはおなじかるべし。これを松にかはらぬ心とはいふなり。翁もその歌にならひて、

天地にうけしまことをそのまゝに咲きてはしぼむ
あさがほの花

三　手折りし枝を慕ふ春風

盛衰榮枯は世の常なり。それによりてこゝろざしをかへぬは、これまた士の常なり。もし時の模様によりて覺悟を變じ、世話に

えりもとにつく　懐の温かなるにつく義で、権勢富貴に媚附することをいふ。

いふ「えりもとにつく」やうにては、何をもて士と申しはべるべき。

翁がよめる歌に、

なれてふくなどりやをしき青柳の手折りし枝をしたふ春かぜ

楊柳の人に折られて、はや木を離れたりとて、春風のそれをよそにして吹きなば、いかに情なかるべきを、なほその手折りし手を去りやらで、惜しみがほに吹くこそ、いとやさしくおぼえはべる。古より忠臣・義士の、盛衰存亡をもて心をかへぬにたとへつべし。

四　月は世々の形見

「大方は月をもめでじ」とはよみたれども、老の心も月見るにぞ慰みはべる。されどそれにつきて、千載無窮の感も起りぬれば、むべ月を人の老となるともいふべかめり。たゞし月を見るにいろ

いろあり。童子の時、家にて八月十五夜の宴に、ひとり隅にむかひてゐたりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつく〴〵と見て、「月は徑いく尺かあるべき。おの〳〵考へてみ給へ。」といふ。またおなじやうの人かたへより「あれはものの切口と見ゆ。奥へ長さいかほどかあらん。」とて、互に僉議しけるを、聞く人々、みな舌をくひけり。翁もをさな心にをかしかりき。今思へば、世俗月を賞して、光のあかきをほこり、影の清きにめでて、良夜とてたゞうち寄り、もの食ひ、酒飲みなどして、歌ひのゝしるをたのしみとするは、かの寸尺を語るにひとしかりぬべし。また騷人・墨客の月を詠めて、字ごとに金玉を雕り、句ごとに錦繍を裁するも、風雅には聞ゆれど、それもたゞ景氣の上をもてあそぶばかりにて、月に深き感あることを知らぬなるべし。われら古人を慕ひて、その書を讀み、その心を知りつゝ、常に世を經たる恨あるに、月ばかりこそ世々の人

白駒の隙 「人生於天地之間如白駒之過隙。」(莊子)

を照らしきて、今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば、月に對して昔をしのびては、さながら古人の面影もうつるやうにおぼえ、月はものいはねども、語るやうにもおぼえ、忘れては昔のことを問はまほしくも思ふぞかし。もとより今は末の世の昔なれば、いづれの代にか、またわがごとく月に對して今をしのぶ人もやあらん。月はさこそその世をも照らすらめ。もしあつらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をも殘さましと思ひはべる。

月見れば末の代までもしのばれて見ぬいにしへの
いとどゆかしき

五 壬子試筆

日月迭に移りて、白駒の隙過ぎやすく、衰病日に侵して、黃金の術成りがたし。されば、犬馬の齢これまであるべしとも思はざり

董生をまなぶ 「下帷發憤讀書、三年不窺園。」(漢書)
程・朱の道 支那の程明道・程伊川及び朱熹の流を汲む學派。
鄒魯の風 孔・孟の學風。鄒は孟子の生地、魯は孔子の生地。
韓・歐 唐の韓退之と宋の歐陽修。
邯鄲の步 自分の本分を忘れ徒に他人の行爲を學ぶの迂愚なることをたとへた故事。「莊子」に見える。
富貴は浮かべる雲 「不義而富且貴於我如浮雲。」(論語)

しが、いつしか老の波寄りきて、今年は七十餘り五つの春にもなりぬ。あまさへ、近き頃より身に痿疾をえて、手足もあがらず、起居もなやめるまゝ、昔の董生をまなぶとにはあらねども、この三とせ春の園を窺ふこともかなはねば、閨の中ながら、梢に傳ふ鶯の音に殘りの夢をさまし、枕にかをる梅が香に過ぎし昔をしのぶばかりになんありける。しかはあれど、幸に若かりし時よりまなびの窓に年を經るかひありて、程・朱の道にしたがひて、鄒魯の風をたづね、韓・歐が文を好みて邯鄲の步をまなぶにぞ、老の寢覺も慰みぬべき。さても多くの年月を經て、世の移り變るありさまを考ふるに、盛衰榮枯互に行きかふをば、夢とやいはん、うつゝとやいはん。まことに「富貴は浮かべる雲のごとく、禍福は糾へる繩のごとし。」といへるに何か違ふことあるべき。中にたゞ、わが聖人のたて給へる三綱・五常の道のみ天地と並び傳へ、古・今のへだてな

禍福は糾へる纆 「禍之與福、何異糾纆。」(賈誼)

蚍蜉の樹を撼かし 「蚍蜉動大樹、可笑不自量。」(韓退之)

精衞が海を塡むる 「發鳩之山有鳥、曰精衞(中略)取西山之木石、以塡東海。」(山海經)

く、こればかりは變ることとあるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきはこの道ぞかし。然れども儒教世に行はれざりしより、人々義理に疎く、利欲にさとくなるほどに、五常の道廢れて、一代の風教を維持せんとすとも、わが力及ぶべきにあらねば、ひとへに蚍蜉の樹を撼かし、精衞が海を塡むるに似たるべし。さはいへど、世を憂へ、民を新にするも、わが儒分內のことなれば、これを度外に置くべきにもあらず。また世に老師・宿儒と稱する人の好んで異說をほしいまゝにし、または他道を雜へて、仁義五常の沙汰をばよそにすることそうけられね。たゞ務めて新奇を競ひて、俗耳を悅ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口をしきことなり。古人のいはゆる阿世曲學とは、これらをいふなるべし。よし人はさもあらばあれ、たとひ風俗は昔にあらずなりぬとも、わが身一つはもとのごとく仁義の道を守りつゝ、前修の模範を失はじと思ふこそ、せめ

奈良のみかど 平城天皇。

て儒となりしるしともいふべけれ。されば、あらたまの春のはじめとて、人はみなおのがこゝろざし、身のさいはひを萬づ代と祝ふ中に、われはたゞ五常の道に心を寄せて、いつも變らずめでたきものはこの道なりとて、かくなん筆を試むるならし。

この春もかはらで行かんなゝそぢにあまる五つの道をたづねて

鶉衣

横井也有

一 奈良團扇の贊

青によし奈良のみかどの御時、いかなる叡慮にあづかりてか、この地の名產とはなれりけん。世はたゞその道の藝くはしから

木の端　「たゞ木の端のやうに思ひたらんこそ、いといとほしけれ。」（枕草子）

桐の箱の家　扇に比したのである。

ば、多能はなくてもあらまし。かれよ、かしこくも風を生ずるの外は、たえて無能にして、一曲一奏の間にもあはざれば、腰にたゝまれて公界に諂ふねぢけ心もなし。たゞ木の端と思ひすてたる雲水の生涯ならん。さるは、桐の箱の家をも求めず、瓢がもとの夕涼、晝寢の枕に宿直して、人の心に秋風たてば、また來ん夏をたのむとも見えず。物置の片隅に紙屑籠と相住みして、鼠の足にけがさるれども、地紙をまくられて、野ざらしとなる扇にはまさりなん。我汝に心をゆるす。汝、我に馴れて、はだか身の寢姿を、あなかしこ、人に語ることなかれ。

袴著る日はやすまする團扇かな

二　長短の解

大はよく小をかね、短は長にまかる、ためし、世にそのたぐひ

龜の尾山　洛西なる嵯峨の龜山をいふ。

五百八十七曲　「そなたと身どもが命は五百八十年七廻り。近頃めでたい。」（狂言、不審紙）

女の髮云々　「女は髮のめでたからんこそ人のめだつべかめれ。」（徒然草）

難波潟云々　「なにはがた短き蘆のふしの間もあはでこの世を過してよとや」（伊勢。新古今集）

多かり。たゞ君を賀し、人を壽ぐにぞ、よはひを長濱の鶴にたぐへ、あるは龜の尾山の尾を引きて、五百八十七曲と祝ひものするには、飽く方あらじかし。その餘はひたぶるに十八大角豆のゆたけきにならへば、獨活の大木の謗を遁れず。出る杙、頭うたれて、つひの益なく、下手の談議のまとまりかねては、軒の柳も眠りがほなり。たゞ女の髮こそめでたくあらましを、手長き人は一門にも遠ざけられ、鼻の下の伸びすぎたるは大事の相談に漏らされて、その夜のうどんの長きを知らず。されば、かならず長きは短きが上にも立ちがたし。ものはたゞ、秋の夜の長くてよからんは長く、難波潟みじかき蘆の長からずしてよきは短くてあらなん。天地もと窮屈ならず、長短は自然にそなへて寸分の詮議はなし。擂粉木は兩手に握るをほどとし、杓子・才槌は片手に足れり。下ざまのものながら、天理のまゝなるぞ尊けれ。わが友田氏、過ぎし頃、かりそ

張子が馬を云
「張果老常騎一白驢、日行千里。休則疊之。其厚如紙、致之于巾箱中。」(淵鑑類函)

「古今」の序に云々
「花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける云々」(古今集序)

めの旅のづとに煙管を贈れり。その短きこと掌にかくすべし。われこの秋西郊にあそぶことありて、調法はなはだ長きにまされり。これをくはへて手をからず、久しくして齒を勞せず。行く〳〵野山に雲を吹き、飽く時は袖にをさむ。張子が馬を懐にするがごとし。こゝにおいて感あり、つひに長短の解をつくりて、これを酬ゆるの詞に代ふ。その辭の長すぎたるは、また才の短きゆゑならし。

三 百蟲の譜

蝶の花に飛びかひたる、優しきもののかぎりなるべし。それも鳴く音のあいなければ、籠に苦しむ身ならぬこそ、なほめでたけれ。さてこそ莊周が夢も、このものには託しけめ。

蛙は「古今」の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ

翁
松尾芭蕉。

やがて死ぬ云
「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲」(芭蕉)

貧の學者に云
晋の車胤の故事。

幸なれ。おぼろ月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このもののこと、さらにも誇りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞るこゝちす。されば、初蝶とも、初蛙ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ、大きなる手がらなれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

螢はたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇はたゞこのもののためにやとまでぞおぼゆる。さるに、貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、このもののほいにはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、ことの外の不自由なり。俳諧にはそのまねすべからず。

蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、ゆふべは

草に露おく頃ならん。つく〲ぼふしといふ蟬は、つくしこひしともいふなり。「筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。」と世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにもおとるべからず。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身をこがすにか。

蜉蝣ははかなきためしに引かれ、蓼食ふ蟲はもの好きの謗となれり。

おなじ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、こがね蟲は卑し。

蝸牛はたゞ水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ちたれども、行く先々を負ひあるくは、水雲の安きにも似ず。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を、駕籠に乗りて富士を眺め行く人には似たり。

原・吉原　共に駿河國にあつて、昔の五十三次の宿驛。

機織・鈴蟲・轡蟲は、その音の似たるをもて名に呼べり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名をつけたるならん。毛生ひむくつけき蟲にもおなじ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一つ在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きり〲すのつゞりさせとは、人のために夜寒を敎へ、藻にすむ蟲はわれからと、たゞ身の上を歎くらんを、蓑蟲のちゝよと呼ぶは、いと優しげなり。されど、父のみこひて、などかは母を慕はざるらん。

蚊は憎むべきかぎりながら、さすが卯月の頃端居めづらしきゆふべ、はじめてほのかに聞きたらん、または長月の頃力なくこりたるは、さびしきかたもあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やりたく里のけむりなど、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊はこと

つゞりさせ云云　「秋風に綻びぬらし藤袴つづりさせてふきり〲すなく。」（在原棟梁。古今集）

われから云云　「あまの刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそなかめ世をば怨みじ。」（藤原直子。古今集）

七賢　阮籍・嵆康・山濤・向秀・劉伶・王戎・阮咸。

にはげしきを、かの七賢の夜話には、いかに團扇のひまなかりけん。

近世名文選 終

昭和五年九月十二日印刷
昭和五年九月十五日發行
昭和六年一月七日訂正再版印刷
昭和六年一月十日訂正再版發行

近世名文選 定價金參拾七錢
昭和六年度臨時定價金五拾八錢

野本製

著者 高木武

發行者 東京市神田區通神保町九番地 合資會社 冨山房

代表者 同所社長 坂本嘉治馬

印刷者 東京市芝區愛宕町三丁目二十二番地 東洋印刷株式會社

發行所 東京市神田區通神保町九 合資會社 冨山房
電話九段一九二一―一九二五番
振替口座東京五〇一一番

課外ニ於いてのもの